

---

# 古秘の水域

水域 色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

古秘の水域

### 【Nコード】

N98230

### 【作者名】

水域 色

### 【あらすじ】

其々一話完結の短編集です。

伝奇物やファンタジー寄りの短編集完結御話を纏めていくつもりです。あらすじは各話の前書きを利用して書いているので是非目を通して頂けると幸いです。

## 第壱話 水辺の社（前書き）

綺麗な水辺にある小さな社には、曖昧で不確かな少女が半透明な風に吹かれ、涙を流していた。

少女が此処で何を想い、どんな想いで長い時を過ごしていたか、など誰にもわかるはずなどないのだけれど。

それでも少女は生きていく。生きることしか出来ないのだから。

## 第壱話 水辺の社

水面は風に吹かれて緩やかに波打ち、流れ込む山水はさらさらと靜かに波紋を作る。

水の中は澄んでいて、其処からの景色は正に幻想的だ。揺らめく水の流れに日の光が絶妙に差し込み、水の中全体を生き物のように蠢き照らしていく。

遠くからは微弱な生物達の呼吸や声がする。生命の音は全てのモノから聞こえる。それは勿論水も例外ではない。

私は水の中で呼吸が出来る。しかしヒトと同じ様に気泡は出ない。それでも頑張つて出すと空気は其処に留まる。その気泡は浮かび上がったリせず、暫くすると塵気楼のように消えていつてしまう。

ああやはり私はヒトならざるモノなのだろう。それは私が何か行動する度に様々な形で思い知らされた事。

もうそんな自分の事がわからなくなっていた。今私は泣いているのか、微笑んでいるのかの其れさえも。

長い間、深い深い水の底のほう。数多の月日を其処で過ごした一つの異形の存在、それが私。

それは気の遠くなるほどに永久の日々。

一つ所に留まり、時の流れを只傍觀して過ごす毎日。時折足を運ぶ人もいたが、最近は疎らになつてきたように感じる。最近といつても普通の感覚では長い年月なのかも知れないけれど。

感情など元から無かつたかのように只淡々と日を重ねていた。此処にいた。

此処は古くから在るさほど大きくもない池。山の麓にある為、山の水や雪解け水が靜かに流れ込む綺麗な水だ。近くには神木と柳がさらさらとなびく所にひっそりと佇むとある社、それが私の住処。

「ああ。これは何回目の太陽なんだろう」

何時ものようにやってくる朝。此処から臨む朝焼けは神秘的な色合いを見せ、朝日が昇れば段々周りの風景も日の光に照らされ蒸し返すような生命の濃い匂いに満ちてくる。

とても緑が映えるこの場所は、真上に日が昇ると木々の間から木洩れの光が差し込んでくる。月日の流れや季節で変わる、とても綺麗な光。綺麗な景色。

夕時になれば空が焼ける。赤橙に染まる空を見るとなんとなく気持ちが悪く落ちてくる。

其れを合図に鳥や動物、蟲や爬虫類など様々な生き物達は私の域に帰ってくる。寝る支度を整える為に。

そして近くの集落ではぼつぼつと明かりが灯り始め、村は落ち着いた雰囲気へと変わる。不規則に並ぶ村の淡い光がどうしようもなく私を切ない気持ちへと駆り立てる。

「私も…」

夜の帷が辺りを覆い、静かな月夜が訪れる。星も一つ一つ光り出し、次第に柔らかな黒がこの村を包み込む。

夜の此処はとても心地良い。草木の響、清水の音、そして日の落ちた空に現れた幾万の輝く星空は、水辺にも反射して水面にもゆらりふわり星空が浮かぶ。

私はその水面に浮かぶ。まるで宇宙に浮かんでいるような錯覚に陥る。そして意識を深く、より深くへと沈ませるのだ。

そしてやがて無心になっていき、水の動きに身を任せる。また日が昇るまで私はそうしていることがよくあった。

ただ其れだけ。其れだけの事なのだ。

私は望まない。いや望めない。これ以上も、以下もない。

そしてまた気付かない内に頬に伝う泪は水面に滴り落ちていく。止めようと何度も堪えるんだけど泪が溢れて止まらない。

こんなにいつもと変わらない穏やかな夜だというのに。いつもと、変わらない独りの夜だった。

また夜が明けて日が昇り、空が焼ける。段々と色が変わっていき次第に青みが増していく。昨日とはまた違う空の青に自然と視線を奪われる。

現在、時は正卯の刻。私は池の岸に腰掛けて足をぶらぶらさせて朝焼けが水面に反射している幻想的な景色を只ぼおっと眺めていた。

「綺麗……」

そういえば最近数日前から村の集落のヒトが酉の刻になれば何人が現れて屯っていたのを思い出した。その一人は和紙を持っていて、他のヒトと会話をしながら思案し、私の域を隈無く散策していた。ああそうか、今年もそんな季節になっていたんだなあと少し感傷的になった。時の流れに疎いつもりはなかったけれど、気付かなかったことに失望感も感じた。

いつの間にかもう祭の季節なのだ。

朝から集まった着物姿の村人よって社の注連縄や、神木の縄などを新しいものに変えられていく。そして張り巡らせた注連縄の中、つまり私の域で年に一度、晩秋に祭は行われる。その祭が今日だった。

社には村で採れた作物を村の女達が綺麗に並べる。

「うわ……美味しそう……」

このお膳立てを主導しているのは、確か神主の娘だったか。名は……確か秋、だったと思う。巫女姿がよく似合う娘で何度か行事で見かけた。

私は聞こえる筈のない声を発する程に彩り鮮やかで美味しそうな料理に思わず笑みがこぼれた。

決して食べる事など出来やしないけれど。私は何時もそれが忍びない。

「今年は良く育った作物で作った料理だからきつと水神様も喜んでいるね、秋」

そう言ったのは秋の母親だろう。私の為に用意してくれたのは勿論嬉しい。

「この実りも水神様の御陰様ですねお母様。感謝の気持ちを込めて私、精一杯お膳立てします」

違うの。私は何もしていない。何の力も無いの。ただ其処に居る事しか、ただ見ている事しか出来ないの。

黙って傍観する事しか、なにもかも曖昧な私には只それしか出来ない…

「ご免なさい…でも本当に有り難う」

私は泣き虫だ。ほら、何かといえば泪が頬を伝う。

気付けば伝った泪も乾かない内に触れる事の出来ない此の手で私は、夢中になって社のお膳立てをする秋の頭を撫でていた。

ちらりと水辺の方を見れば着物や浴衣を着ている村の男達が集まっていた。いつも着ている浴衣とは少し違う、所謂あれは祭用の浴衣なのだろう。

普段の浴衣は藍色だったり鈍色だったりのようだが、今日は綺麗な深緑や蒼色に藍鼠色などの貴重な色の反物に、唐草だったり様々な模様が縫われている。

着物や浴衣を変えているせいか、村の男達の雰囲気も高揚感に満ちているように見える。作業している表情も活き活きと楽しそうである。

どうやら彼等は水辺に今日の祭で、本殿とは別で使う祈祷所を用意しているようだ。因みに本殿は、私がよく居る小さな社のことだ。私と崇められている御神体がその小さな社、つまり本殿に祭られている。

拝殿は年越しの時期にしか基本的に用意されないみたいなので、拝殿は本殿と殆ど同義ということになっている。

此の祭の度に、水辺のとある一カ所に立派な木材を使って祈祷所を拵える。簡易的な祈祷所ではあるけれど村のヒトの気持ちがこも

っているから私はとても嬉しい。

「おい。祈祷所の準備が整ったぞ。後で神主様に見てもらうべ」  
体格の良い男がそう言えば、疎らだった数人のヒトが水辺にゆっくりと集まってくる。

「おお、やるなあ。今年も立派じゃないか。こりや良く出来てる」

「当然さ、この祈祷所造りは家系で受け継いだ職人の腕よ」

「そうね。あなた頑張ってお父様に習っていたものね」

「ああ。親父が具合悪くしちまってから仕事受け継いで…沢山苦勞したけれど漸く此処まで辿り着けたよ」

集まったヒト達が会話している内にどんどんヒトが集まってくる。

「わ、私も本殿の社の方の拵えは済みました」

「ねえちよつと、もつと酒はあるのかーい？此処にある分じゃ今日の宴にや足りないよ」

「今日の祭の楔ぎは誰だっけ？」

「なあ、確かあいつの家にい干し芋と肉があつたよな。準備できたから持参して来いって伝えてくれ」

「わっはっはっは、よーしこりや楽しいな。じゃあ、また夕暮れ時にな」

体格の良い男の夕暮れ時にな、という言葉でさっきまでの喧騒が落ち着き始め、沢山集まっていたヒトが徐々に疎らになり、誰もいなくなる。

散り散りになった村人はこの後、また沢山の村人を引き連れて大宴会を開くのだろう。私も何年も見ているけれど本当に楽しそうな宴だ。楽しそうに身を寄せ合い、村で作った清酒や果実酒を飲みながら、狩りなどで捕まえた獣の肉を香ばしく料理して、皆の話を酒の肴に呑めや唄え、騒げや唄えの騒ぎになる。

参加は事実上出来ないものと同じだろうけれど私は、毎年其処に居た。

一度集まっていたヒト達はまた疎らになり、今日の祭の事など談笑しながらそれぞれの家に一旦戻っていく。



祭場の準備は終わったみたいだから多分、これから宴の為の準備に入るのだらう。各自家から饗のいい地酒と、酒の肴を持ち寄るために。

そして呻の刻。日は傾き始め、空の青が焼けてくる。

先程は数人の男女だったが村のヒトほぼ全員来るだらう。傾き始めた太陽に合わせて祭場には灯火が灯り、疎らではあるけれど、次から次へと村人が集まってきた。

此処の暗がりにはほんのり火が灯る光景もこの祭位なもので、とても雰囲気が良い。柳も灯りに少し照らされながらさらさらと優しい微風に流されている。

思い思いの場所に腰を下ろし始めた村人達は持ち寄った果実酒や清酒を、卓袱台や四角の台などに乗せる。料理された香ばしい菓草が効いた肉や様々な燻製、干物が運ばれ、あつという間に宴会の準備が整ってしまった。

この祭の行事の中で襷みそぎはらえぎ、正確には襷みそぎはらえ褌はらえ。というものがある。

襷褌は神道や仏教で自分自身の身に穢れのある時や重大な神事などに従う前、又は最中に、自分自身の身を氷水、滝、川や海で洗いきめることを云う。

滝打などは水垢離みづしりと呼ばれたりするのだが、私の水辺には滝などないので水垢離はできない。

襷褌は白装束が基本的に原則だが、男は褌で行う場合もあった。その年によって変わっていたので強い縛りはないようだ。

褌の場合、白の越中褌が原則だったりするのだが、白の六尺褌の場合もある。けれど、今まで見た中で褌の襷褌はあまり居なかったように思える。

時には袴姿のヒトも居たので、割と自由なのかもしれない。

この祭の襷褌は、一人前と認められる為に年頃の童がいた場合に儀式として行なわれる。勿論それは今そこで酒を飲んでいる大人た

ちも、その親、その先祖とずっと私は見てきた。

そもそも、この通過儀礼とか祭事だとか、禊祓もだけれど村人達は「水神様に認めてもらう為に必要」とか、「祈祷しなければ水神様に崇まれる」とか。私は禊祓をしなくてもなんにもしないし、なんにも出来ない。祟る理由もなければ今使える力もない。

だから。この晩秋の寒い時期に水の中に入って祈祷するなんて寒そうでいつも毎回忍びないのだ。勿論各々の祈祷は私に届いている。私はこの禊祓をいつも祈祷所の対岸に腰を掛けてその様子を視ている。儀式を行うヒトとは丁度向かい合わせの形となり、禊祓を静かに見守る。

今年は二人の童が禊祓を行なうみたいで、祭や宴の準備が粗方終わると二人の童が白装束を着て祈祷所やってきた。

「秋、すっかり水神様に祈祷するのよ？」

「お母様、御心配有り難う御座います。今年も少し寒いけれど私は大丈夫ですから」

祈祷所のそばに來た秋の母は心配そうに秋に寄り添っていた。そういえば秋の母の禊祓もそうやって親が寄り添っていたつけ。

間もなくもう一人の男の童が現れる。少し長めの黒髪で痩せ型の童だ。どこか不思議な雰囲気がある童だなと、普段あまり感じない事をその姿を見ながら思っていた。

「遅れました。秋、早かったんだな」

そうふわっとした空気を纏って最初に着いていた親子に話かけた。

同じく白装束を身にまとった神主の娘の秋と同じ年の童の名は確か蒼<sup>あお</sup>。

「蒼、とうとう私達にも禊祓の日がやってきたね」

年相応の屈託のない微笑みを浮かべると、母親から離れて蒼の元へ淑やかに歩いていく。

「ああ。多少距離があるとはいえ、周りに皆いるからちよつと緊張するけれどね」

隣にやってきた秋の頭を撫でれば、灯りに淡く照らされた蒼の表情が、生まれもった雰囲気と相俟ってなんだか彼が幻想的に見えた。実は私は彼、蒼の事をずっと昔から知っている。小さな頃に私、というか水池の中に蒼が落ちてきたのだ。バシャバシャと溺れていて私もどうしたらいいのかわからなくて。結局水辺までうまく連れて行った所で、蒼を見つけた親御に抱き締められていた。親御の心配そうで安堵した表情はまだ覚えている。

その後久々に蒼を見たけれど流石にヒトは成長が早い。大きく育ったなあと知らず知らず頬が上がり、笑みが零れる。

「じゃあ後の事は神主様にお任せします」

「はい、解りました。私が近くしつかり見守りますので、皆様と一緒に宴場で見守ってあげて下さい」

秋の側にいた母親にそう言うのと神主が微笑を浮かべ、秋の母親を宴の席へと誘う。襦袢中は、近くには来てはならない掟があるからだ。勿論神主はそれに当てはまらないが。

「ねえ蒼。蒼は今どんな気持ち？」

「ん？んー…水神様と話しが出来る機会を得て、嬉しいかな」

「…えっ」

私は動揺したのか、思わず懷に仕舞っていた簪を水辺に落とすうになった。この簪は大切な簪だ。遠い昔にこの森の近くで拾った綺麗な深翠の簪。大事に懷へと落とさないように、仕舞う。

「そうね、この襦袢は水神様に少し近付ける儀式だと父様が言っていましたものね」

「うん。小さい頃に聞いた神主様のその言葉をずっと信じてこの日を待ってたよ」

「…伝わるといいね、蒼。私も気持ちを込めて祈禱する」

「うん。そして襦袢が終わったら俺らも一人前だ」

驚いた。というのはこの二人の祈禱に興味が湧いた自分の心にだ。

「何を伝えてくれるんだろう」

宴の場から漏れる灯りは祈祷所を淡く照らし、焼けた空は先刻より仄暗くも優しい帝王紫色に変わっていく。変わりゆく空を映し出して染まっている水面を眺めながらそんな風に想った。

「それじゃ始めるよ。準備はいいかな？秋、蒼。」

「はい、大丈夫ですお父様」

「うん、いつでも大丈夫ですよ」

二人の返事を穏やかな表情で受け取ると、秋と蒼の頭をくしゃつと撫でればゆつくりと祈祷所から離れていく。

「さあ、行こう。蒼」

秋が優しく微笑みかけて蒼に手を差し出す。周りの空気までもが秋に影響されたかのようにふんわりと優しさを孕んでいる。

蒼も頷き、手を握る。二人は目配せをすると手を離して祈祷所で柏手を打ち、礼を何度かするとその先の水辺へと静に足を運ぶ。

二人は柏手を打った瞬間、儀式が始まってからは無言を貫いていた。

そして一步一步私に近づく一際大きく感じる生命の匂いに私の域と心が揺さぶられる。

緩やかに水面が風波で揺れる。秋と蒼は同時に左脚からの入水。水辺の方はまだ水位が浅いので腰より少し上の辺りまで二人は静に歩いてくる。向かい合う私は只じつと、その様子を視ていた。

二人は立ち止まると一度柏手を打ち、しゃがみ込んで頭まで水に浸かった。髪や頬は濡れ、雫が水面に滴り落ちている。

もう一度二人同時に柏手を打つと、手を合わせ祈祷し始めた。二人の心の声が私に流れ込んでくる。

「水神様。私は秋と、水無月秋と申します。現神主の娘に御座います」

「うん。秋、知ってるよ」

「楔抜の日がやってきて、水神様に数瞬だとしても近付く事が出来てとても嬉しいです。こんな未熟な私ですがこの先未来も御守り頂ければ光栄です。…あとは黙禱で祈祷致します」

そう秋の心の声が流れ込んでくると本当に無心で黙禱しているらしく、私にはもうなにも流れ込んでこない。私が知りうる限り未だかつてそんなヒトはいなかった。何かしらの雑念をヒトは必ず抱いているからだ。

秋がもつ神職としての素質は以前から気にはなっていたけれどもさか此処までとは思わなかった。

しかし類い希なる異質故に見えざるモノが見えてしまうのではないかと心配になりながらも黙禱中の秋を見つめた。そして。

「水神様。僕は古音蒼と申します。一人前にと認められることよりも、水神様に少し近付けるという意味合いで今日の楔抜をずっと待ち焦がれていました」

「…」

何だろう。得体の知れない心のざわつきを感じる。

「以前まだ小さかった頃ですが僕はこの水池に無意識なのですが落ちてしまったらしいのです。その時の記憶はかなり曖昧になってしまっているのですが、一つ覚えている事があるんです」

「…えっ、何かな…？」

「僕は水神様の姿を視たような気がします。幼い容姿の女の子が綺麗な黒髪を水の中で月光色に染めて、水際まで僕を導いてくれた気がするんです。どうしても御礼が云いたかった」

「…っつ」

言葉が出なかった。出した所で聞こえはしないのだけれど。蒼に私が一瞬でも私が見えていた？もしかしたら私はその時この世に干渉し過ぎたのかもしれない。この事は良くないと思いながらも何故だかすごく、すごく嬉しかった。

「…ありがとう、水神様」

「…うん」

「僕達村人の色んな想いや願い、不作の責任等の其れらは水神様に對する自分勝手なエゴだ。そうゆう諸々を水神様に全て丸投げする今の村の考え方、思想、雰囲気が気に入りません。今まで心の寄り処に水神様を頼り過ぎていたように僕は思ふのです」

「…私は沢山の願い、想い、忌み、妬み、呪いを聞いてきた。けれど蒼がそんな風に、其処まで思考する必要はないんだよ？気にしないで欲しいな」

「そうゆう諸々をひつくるめて僕は水神様に祈ります。それと、思い上がりも甚だしいですが水神様はきっと今まで寂しかったのではないでしようか。此方からは何も出来ていない事が歯痒い思いをしています…。水神様、何時も有り難う御座います。僕はもっと精進致しますので、もしこの祈禱が水神様に聞こえてましたらどうか末永く御見守り下さいませ…」

蒼の、あまりに深い考え方や想いを聞いて少しそのまま静観してしまっていた。蒼、という童は今までのヒトとは何処か違う気がする。其れは雰囲気だけじゃない根本的な説明出来ないにかが。数分の間に私の心に何かが芽生えた気がした。

二人が祈禱を始めて数十分経ったか、すっかり空は夜の帷が覆い始め、水面には幾つか星が反射している。

山からはゆつくりと三日月が昇りはじめ、星と共にゆらりふわりと水面で綺麗に揺らめいている。

二人の祈禱は、三日月からの月光を浴びながら祈禱所で柏手を打つ事で終わりとなる。もつと色んな手法があるけれどこの村ではこれで一人前と認められる。二人は視線を合わせると、月明かりの下で静に微笑み合った。

水池からざばつと上がり、祈禱所まで歩いていく。土も、草も、木も、空気も灯りの淡い光さえも歓迎しているように二人をふわり包み込む。

二人揃って柏手を打ち、礼をする。これで今年の禊祓も終わりだ。「おめでとう、寒かつたろう。早く暖をとって、着替えておいで」

二人が振り向くと神主が微笑んで二人のまだ水が滴り落ち、体温で少し暖かくなった湿気のある髪をくしゃつと撫でた。もう一度、只一言おめでとう、と呟いて。

私は祈禱所から見て向こう側で其れを見ていた。私もたった一言、「有り難う」と呟いて。

其れから二人は一度暖をとって蒼は浴衣、秋は着物に着替えて宴場へと向かう。宴場の大人は淡い灯りの中それを待っていたかのようになにかが掛け声をする。と酒が入った器をぶつけ合って一気に村人達に笑いが溢れ出して、晩秋の宴が賑やかに始まった。

私も宴場へと向かおうとしたけれど何故か身体が痺れたように足が云うことを効かなかった。それと同時に私は先程の禊祓から生まれた、捨てた筈の感情を抑えるのに必死だった。

「話をしてみたい。私に気付いてほしい」

そんな感情などとうの昔に捨て去った筈だ。

そんな叶うはずのない想いを抱いてどれだけの傷を負ってきたか自分が良く知ってる筈だ、なのに。

二人の影を追いかけてみる。意識は宴場へと向いているのに身体

がもつれて思うように歩く事ができなくてもどかしい。

とてとてと追いかけて歩いて、手を伸ばしては足が止まる。あんなに淡く灯る暖かい場所が遠く、とても遠く感じた。

「…お願い、待ってっ…」

必死に哀願しているとふと何か目に入り気付く。近くの木にもたれかかっている漆黒の髪で碧眼の男。灰色の煙草から煙る紫煙がふわふわと男の周りを包み込む姿は、只々怪しい。

「何処へ行く、等と野暮な事は云わないが…水神、わかっているんだろうな。俺が枷にと落として置き、お前が拾ったその懐の簪がその抑制効果なんだ。簪を身から外せば数分力は解放されるだろうし今の願いは叶うだろうな」

がしかし、と。其れを実行したなら数年は眠る事になると思う、と男は云った。けれど今の私には迷い等、毛頭無かった。

そしてこの時、碧眼の男が普通に私を視て、私に話し掛けている事に気付く事が出来ない程に私はもう色々と手遅れだった。この時、私の答えはもう既に決まっていた。簪は話を聞いてすぐに碧眼の男に渡したからだ。

私は軽くなつた足であの賑やかな淡い光の空間に走っていく。柳は素知らぬように優雅に揺れていた。宴の間では既に出来上がったヒトもいて、酒が勢いよく無くなっていくので必然的に村人達は盛り上がったていた。

この晩秋の祭には、狐踊りなるものがある。参加している村人数人が狐の御面を被り、踊る。酒を片手に、思うままに。囃子はやしが奏でる音に、幻想の悠久に身を乗せて。

私が淡い光の中に着いた時には、村人は狐の御面を付け、楽しそうに飲み、唄い、踊っていた。もう私には宴を楽しんでいる時間などない。自分でもそれがよくわかった。進む抑えられない力を制御できない。簪を碧眼の男に渡したからだろうか。

数人によって奏でられた音楽に乗って踊るヒト達の中から、秋と



蒼を見つけるのに時間は掛からなかった。彼らから発せられる全てが他のヒトと色が違うから。

私はゆっくり二人に近づいてゆく。踊る狐の大人達をすり抜けながら、漸くたどり着いて私はまた酷く痛感する。

知らずの内に涙が頬をゆつくりと伝う。幾度も幾度も蒼の裾を掴もうとするのに、掴める事は一切なく、手には何も残らず空を掴むのみだった。

「…蒼、秋っ」

悲痛だな、と自分でも思った。周りの楽しそうに踊る沢山の狐の御面達の中、私は何をしているんだろう、と。数多の時を独りで過ごし、捨て去った沢山の感情。幾ら泣いてもその泪は誰にも見えないうし、私の声は誰にも聴こえない事で私は、今まで沢山心が傷付いてきた。私は未だに其れを望んでいたのか。二人の童に向かって声を発する程に。届くはずのないこの曖昧な声を。

二人は不意に何かに気付いたかのように此方を振り向く。まるで私を見ているように、だ。

そして周りの村人達が踊っているままで、私と二人の間だけ時が止まったように二人は動きを止めて振り返っていた。

「あれ…君、は…？」

「蒼…。私達、もしかして酔っ払っているのかな。蒼が昔話してくれた女の子が、目の前に居る気がする…」

私の体はもう薄くなってきたいて殆ど残ってはいなかった。気付いてくれた事に心の底から溢れる暖かい感情はもう私には止められないし、なにより伝えたい事があったから、決してこの機会を逃すわけにはいかなかった。どんなにこの身を犠牲にしても。

「水神様…？水神様っ！」

秋がこんなに取り乱している所、初めてみたなあなんて、意外にも私は落ち着いてきた事に気付く。

「秋、秋。私はこうしてちゃんと居るよ。こうして曖昧でも存在して居るんだよ。お願い、どうか私を忘れないで、秋…」

だめだな私、こんな時なのにうまく喋る事が出来ない。私は秋にこんなことを云いたかったんじゃない、いつもありがとって言いたかったんだ。

「水神様、えつと…えつと！幼い頃、お世話になりました、有り難うございました。この命は水神様の加護の御陰です」

「蒼、無事育ってくれて良かった。蒼の祈祷、全て聴いていました。私は、寂しかった…凄く寂しかった」

堪え切れず泪は溢れ、うまく喋れない。今まで口に出すまいと心の奥底に押し込んだ想いが溢れて止まらなかった。私はずっと、寂しかった。

「蒼、私はこの感情の事を良く知らないの。貴方を見ていると苦しい。切ない。まるで病氣みたい。だけれど、約束する。何も出来ないけれど私は蒼と秋、皆を見守り続けるよ。だって私に出来る事はそれくらいだもん」

ふわり微笑んだ私の頬にはやはりまだ、泪が伝っていた。身体は宴の喧騒と灯りに照らされながらもどんどん色を失い、次第に私を彩る色彩も薄くなっていく。狭くなっていく視界には、泪を浮かべる泣き顔の秋と蒼の姿があった。

「ああ、瞼が重いな。どんどん見えなくなってきたし眠く…なってきた…」

うつすらと見える淡い灯りに包まれた空間の中楽しげな宴と、狐の御面をした数人の村人の舞とその囃子がこの日私が見た最後の風景だった。

随分と長い夢を視ていたような気がする。柵しがらみから解放されたような清々しい気持ちで私は水の中をふわりゆらり。生命の匂いを全身で感じ、差し込んでくる日の光が蠢くのを綺麗だな…と見ていると

思えば急に周りがぐにやつと歪み始めて景色は変わり、見慣れた筈の星空が水の中なのに周りで淡く光っていた。手の届きそうな距離にある星の輝きに手を伸ばしてみるのだけれど届くことはなかった。其の時間はまるで、足が竦む程綺麗な宇宙を漂っているように感じた。

そして目を覚ました時、満開に咲く桜が目に入った。夢現に思考がうまく廻らない。私が今見ている風景は夢か、現実か。

ふと気付けばいつかの碧眼の男が側に居た。その男が云うには私は二十七年の間此処で眠っていたらしい。

不思議だったのだけれど、私が最後に見たときと全く変わらない容姿だった。

ふと私が碧眼の男が手に持っていた酒に目をやると男は灰色の煙草の煙を身に纏わせながら、

「積もる話もあるだろう、それを酒の肴にまあ一杯。ほら」

渡された綺麗な深翠の器に注がれた酒を口に含むと豊潤な悠久の味がした。私の事を何故か勝手に「水姫」と呼ぶ碧眼の男に向かい合って、私は器を差し出した。

桃色が舞うこの季節に、器をぶつけ合って乾杯したような音が辺りに響いた。

通りかかった村の男が、小さな社の在る水辺で碧眼の男が一人楽しそうに話しながら、綺麗な深緑の器で酒を飲んでいたので見た、とその日村中に云って回った。

数時間後、村人数人で見に行ってみると其処には深緑の綺麗な器だけが社の前に置かれていたのだという。



## 第壱話 水辺の社（後書き）

伝奇物を書いてみました。

執筆する際に、水姫の気持ちを考えながら執筆したのですが、普通の「ヒト」の私では解るはずもなく、なかなか書くことが出来なかった作品でした。

現代よりも昔、まだ服は洋服ではなく着物や浴衣の時代をイメージしています。

気付いた方もいらっしゃるかもしれませんが、舞台はとある山の麓にしました。

神社を軸に描きたかった作品で、私の好みが全開の短編となり満足できました。

## 第弐話 夜を連れた白い月（前書き）

山と山に挟まれた小さな村。村人は只平凡に生活を送っているが、ある日異変が村を襲う。

夜の闇は人の心を容易く支配し、浮かぶ月は素知らぬように淡い光で村を包み込む。月灯りの物語の和風ファンタジー。

## 第式話 夜を連れた白い月

空は平等に上に在る。空は様々な色で世界を包み込んでくれる。優しく、厳しく。

空を彩る黒色の中にふわり浮かぶ月は何時も変わらず其処にあつて、日を重ねる毎に形を変えていく。

今宵は満月が闇夜に浮かんでいる。月が浮かんだ空の其処だけ、穴がぽつかりと開いているように見えた。

闇を照らす満月の月光が世界の半分を照らす中、とある村も月は同様に淡く包み込む。山の生命達も月灯りの下、噓せ返る匂いを発して、仄かな灯りを浴びて蠢いている。

木々は静かに風の流れに身を任せ、緑の匂いを放ちながらさらさらと音がする。吸い込んだ雨水や雪解け水が山から溪谷へと流れ落ちる滝は村の近くに流れ落ち、淡い月の灯りをきらきらと綺麗に反射して、宝石のような金色の水となって流れていく。

そんな金色の滝の近辺、大きく聳え立つ山と山の溪谷にひっそりと在る仄暗い村は一見して見れば寂れた風、とまではいかないけれどもどこか哀愁を漂わせていて、聳え立つ木々は素知らぬ様に静かに揺れている。村を照らしつける淡い月灯りが其れを更に助長させ、印象的にしていた。

そんなに大きくない村だけれど、集落もいくつかある。他の村同様に畑や田圃が耕たんぼされているし、旅人が山を越える時によく立ち寄る、地理的にも評判だった。

そんな村には元来昔から呼ばれていた名前があるのだけれど、今は訳あつて夜闇村やみむら、と呼ばれている。そうとしか呼ばれていない。

そんな夜闇村に関する、とある噂がある。近頃この辺りを通る旅人達もよく知っている、お伽のような噂だ。

曰く、夜闇村には太陽が昇ってこないのだと云う。奇妙な事に月が沈むと太陽は昇らず、また月が昇り始め、微かに形を変えて浮か

んでいるのだと云う。

曰く、白い死神が山に住んでいるのだと云う。村人が云うには太陽が昇らないのはその白い死神の呪なのだ云う。

そんな噂が近くの山を越えた村や、その隣村にまで広がっているという。

夜闇村の隣の村から仕入れた、一枚の和紙に書かれているその噂を眺めながら、男は遺憾に思っていた。

「何故こんな目に……」

そんな呟きは夜闇村のとある小さな集会所に静かに響く。歩くとぎしぎしと軋む床の音も、灯火が揺らめいて薄暗く照らされた部屋の中では只々酷く不気味な音である。

集まっている浴衣姿の男達の中の一人に、山吹<sup>やまぶき</sup>という男がいる。

歳は二十一、容姿は臙脂色の浴衣に、短髪で整った顔立ちをしている。村の中でも有数の刀持ちであり、日本刀が腰に治まっている。

その日本刀は見事な拵<sup>おうけ</sup>えで、かの有名な、妖刀村正と同時期に作られた日本刀で名を桜華と云う。

どんな日本刀でも持てるのを許可されているのは現時点でこの村では村長の他に山吹だけである。

そんな山吹が渋い表情で目を通す和紙にはこう書かれている。

以下、夜闇村の奇譚を記す。

山に挟まれしその村には数年前から太陽が昇らないのだという。

太陽と云うのはそう、空に浮かぶあの太陽である。様々な方法でその原因を探ってみても皆首を傾げるばかり。時折寄っていく旅人達に尋ねてみても解らなかつたようだ。

日が当たらない事で当然作物は育たなくなり、飢餓に困り果てたと云う。

夜闇村ではその変化に対応して、今では月灯りで育つ奇妙な作物が採れるのだと云う。細長い果物や、蛍光色の野菜等様々。一見とても気味が悪そうだが。



亦、この夜闇村には白い死神が出ると云う。山で月灯りに照らされて佇んでいる姿を村人が目撃したのだと云う。其れは其れは恐ろしいと村人は怯えて暮らしているらしいのだ。

亦、夜闇村では一部流行り病に苦しんでいて、村人は白い死神の祟りだと祈禱師が日々祈りを捧げながらも、討伐隊も結成された。白い死神を討伐出来るか否かは正直判断しかねるが、討伐隊は死神と呼ばれる存在を討ち消す事で太陽を取り戻せると信じているし、流行り病も落ち着くと信じて行動しているようだ

和紙を眺めながら嘆息すると山吹は周りの男達を一瞥する。薄暗い集会所が静寂に支配されそうになっていた。

「もうこんなにまで広まってしまつては、村の評判も右肩下がりの方じゃないか」

山吹の隣に胡座をかいてそう呟いた男の名前は宗時そとぎと云う。歳は山吹と同じ二十一。

京紫色の浴衣姿に黒くて長い髪を後ろで束ねていて、宗時の前には小刀が置かれている。

小刀に関しても村では規制があり、刀持ちの人間の指揮する団体の中で選ばれた者が持てるもの。基本的に物資不足で貴重品な為、全員に持たすことが出来ないのだ。

「其れを俺に言われても困るんだよ宗時。それに、そんな事は既に分かりきつた事だ」

困惑顔を浮かべる山吹は、少し離れた所に座る歳は十六の少年、海うみに話し掛ける。薄い蒼色の浴衣を着ていて、幼さの残る顔立ちをしている。

「最後に白い死神を見たのは確か、海の所の妹だったか？」

突然振られた話に海はたじろいで緊張で身体が硬直した。海にとつて山吹は憧れの存在であると同時に恩人であるからだ。

前に冬の山で海が遭難した時の事。吹き荒れる暴風雪で、降り積もった雪も激しく舞い上がっていた。

そんな過酷な状況の中、足を怪我して動けなくなり死を覚悟した。

薄れゆく視界と、麻痺した神経。激しい眠気に加えて走馬灯を体験した。思い出すかつて太陽が昇っていた活気のある優しい村、今も尚続く悠久の月夜、家族の団欒、友人の笑顔。

あまりの寒さと過酷さに意識を手放して放棄した時の事だった。突然の事で理解するのに時間がかかった。

目の前に人が立っていたからだ。そしてその人の名前を海は知っていた。

「海、無事で良かった、探したよ。さあ…帰ろう」

動かなくなつて役に立たない身体を背負つて歩いていく山吹さんの背中には優しい暖かさで満ちていた。涙が絶えず頬を濡らした。寒さで涙が伝った跡が凍つてもまた、涙が其れを溶かすほど、海は泣いた。

あの日程自分の生命の誓を濃く感じた事はなかった。

海はそんな事を思い出していると幾らか遅れて返事をする。

「は、はい。もう一ヶ月くらい前になるでしょうか、妹の渚と僕とで山へ出掛けた時なんです、渚が見たと云つておりました。僕は全く気付けなかったのですが、ゆらりふわり此方を見て佇んでいたそうなんです」

山吹は海の話の聞くと口元に手をあてがい、深く思考する。

「そう…か。明日にでも渚に会つて詳しい話を聞くとする。細かい場所等も聞いておきたい」

「了解しました」つと頭を下げ会釈をすると海は軽い緊張状態から解放されて、安堵の息を吐くも、羨望の眼差しで山吹に視線を送ったのだった。

「しかしよ、山吹。かれこれ数年死神を追い掛けてるが、見つけれないってのは一体なんなんだろうな？」

そう発言した男は手元に置かれた酒をグイッと喉に通し、飲み干すと満足そうに器を床に置く。髭を生やして体格がいい男の名は佐久美<sup>くみ</sup>。歳は三十で、灰色の浴衣を着ている。佐久美は村で狩猟をしているために火縄銃を所持していて、討伐隊としても貴重な存在と

なっている。

「確かに。佐久美さん、俺も恥ずかしながら今まで一度もその姿を見た事がないんだ。時々死神なんていないのでは、なんて思ってたんだ」

「おいおい、そりゃあ山吹が言っちゃあ駄目だろう。お前が指揮してんだから」

隣で宗時が髪を掻きながらばやく。「…そうだな」と山吹は哀愁ともとれる微妙な表情をした。

酒を呑みながらの集会は、討伐の話題から畑や田圃の仕事の話や雑談へと変わっていく。佐久美が空になった酒瓶を端っこに持つて行くと更に数本の酒を新たに持つてきて機嫌良さそうに注いで回る。まるで村に漂う不安や不穏、陰気な雰囲気払拭するように注がれた酒を呑み、また日が昇る事を祈って唄った。静寂などまるで無かったかのように男達は笑うのだった。

そうしている内に現在時刻は十時を回り、集会も御開きとなった。

「山吹」

片付けが終わり、帰宅しようとしていた山吹に宗時が心配そうな表情で話し掛ける。

「山吹の親父さん、大丈夫か？さっきの和紙にもちらつと書いてあったが、祈祷師なんだろう？やっぱりまだあんまり死神討ち取る事にはいい顔しないんじゃないか？」

山吹は村長より白い死神調査と、討伐を命じられた。祈祷師である父親はその時村長に異議を申し立てたが、村人は皆この異常事態に恐怖し、山吹も受け入れたのでやむなく計画は進んだけれど、今も祈祷師として死を司っている神を鎮める為に祈っているのだ。

「そうだな。けれど祈祷だけで済むならもう終わっているはずだしな。勿論親父は尊敬してるけれど俺は俺で動くよ。現状を打破する為に」

宗時は山吹の言葉を聞くと静に微笑んで「そうだな」と安堵して呟けば横に並び、集会所を後にして互いに帰路へとついた。

空の黒は依然変わらず天を染め上げ、足が眩む程の存在感を放つ月は山に隠れだし、ゆっくりとゆっくりと沈んでいく。完全な闇に包まれて村は微睡み、一日が終わっていく。金色の滝も、今は無色透明の滝となり、無数の水滴は谷底へと激しく落ちていった。

程なくして淡い半透明の灯りが村を仄かに照らされる。先程とは違う、鮮やかな三日月が昇ってきたのだ。悠久と錯覚する程に繰り返される夜はまた月の灯りに照らされて、村ではまた夕闇の朝を迎える。生き物は日の出もとい、月の出を感じると蠢きだす。まるで太陽の光の下活動しているかのように。滝の色もきらきらと金色に照らされている。

村からもれる灯りは月が沈んだほんの少しの時間に消せるわけも無く。朝まで灯り続け、ずっと消える事はなかった

「ほー、確かに夜だ。噂通りだねかし。本当に朝か？ねえあんた、何か時計か何か持ってるか？」

時刻は朝八時過ぎ。夜闇村の入口には商人と旅人と思しき男が村と三日月の灯りに照らされて二人、立ち止まっていた。一人は髭を生やした瘦せ型の商人風の男で、紫色の浴衣を着ている。軽荷物を地面の上に置くと、隣にいる旅人に話し掛けていた。

「ん？ああ。ちょっとまってくれるか。えー…つと、ほら」

黒髪で碧眼の男が深緑色した浴衣の袖から古めかしい懐中時計を取り出すと、髭の男に渡す。

「おお、なんだか珍しい懐中時計じゃないか。どれどれ？うーん、やっぱり朝なんだねえ…。朝なのに月がでているなんて不思議な事もあるもんだな。あ、そうだ！…なあ碧眼の兄ちゃん。山道で何か荷物を見なかったか？野宿した時忘れたみたいだな。急いで戻ったが見当たらないんだ。中に商売品入ってたんだよな」

くそつと毒吐けばさっきまで下山していた山を商人は恨めしそう

にみる。しかし端から見ても誰もがこの髭の男が悪いと言うだろう。碧眼の男が袖から灰色の煙草を取り出して火を付け、紫煙を深く吸い込むと吐き出す。煙は三日月に照らされてゆらりふわり踊っている。

「お察します。因みに何が入っていたんですか？」

「着物や浴衣さ。上質で綺麗な反物が遠くの村で仕入れられたんでな。雪のように繊細で白い浴衣と、桜のように淡く染められた着物さ。此处で高く売ろうと思ったんだがなあ」

商人として辟易するよと呟けば決まり悪そうに頭を掻きながら苦笑いする。

「あんたは？よく見れば珍しい瞳の色だが…そうだな。商人って感じでもないし、旅人か？粗方、奇妙な嘸でも耳にしてわざわざやって来たんだろう」

興味津々に髭の商人は碧眼の男に問い掛ける。商人の云う奇妙な嘸とは、太陽が昇らない村とか死神の嘸だろう。

「まあ、そんなものかな。様子を見に来ただけけど、こりゃ…」  
成程ね…と呟けば灰色の煙草の紫煙がふわふわと揺れた。そして商人が何が成程なんだ？と聞こうとした時。

「ようこそ。商人様と旅人様でよろしいですかね？」

村から、門番などと仰々しいものではないが、男が足早にやってきた。

異変が起きてからというものの、商人や旅人々が村に入る前に軽く質問をする習慣ができたらしい。

入村した人を把握する為らしいのだが、それは何かあった時の為の予防線なのだろう。

出身や目的等簡単な質問を受けると、「やれやれ…」と呟けば髭の商人が置いていた荷物を持ち上げ、振り向く。

「じゃあな。また縁があつたら商売させてくれな兄ちゃん。此处で俺は何かめばしい物を探しにいくよ」

荷物で塞がってない方の手を挙げると商人はずんずん村の中へと

入っていく。

「あ、門番さん。すみませんが、この村の村長さんの住処は何処らへんです？」

碧眼の男は商人を見送った後、吸い終わった灰色の煙草の火を消しながら門番に話し掛ける。

「えっ？あー…此処から少し離れた所ですが、この道を真っ直ぐ行けば次第に大きな柳の木が見えてきますので、そこの屋敷が村長さんの住処ですよ。ただ…」

「ん、ただ？」

「ただ、今は御存知の通り村はこの様な状態なので、村長さんも非常に忙しそうにしています。はっきりいってちゃんと話が出来るかは保証しかねるんですよ」

申し訳無さそうに門番の男は呟く。村長は村長で調べ物をしたり、山吹の報告を纏めたりと忙しいようだ。

「わかった。忠告有り難う」

碧眼の男は一度振り返って月夜の淡い灯りに照らされた山を目を細めて見る。そうして門番に手を挙げると、流れ落ちる金色の滝を背に村の中をゆっくりと歩いて、闇夜に揺れる大きな柳のほうへと向かって行ったのだった

同刻朝八時。村人は朝日を浴びる事無く目を覚ます。空に浮かぶ月は村に朝を拙い灯りで伝えるのだ。外では、闇夜の空に同化した真っ黒い鴉が群れて鳴いていた。初めてこの村で宿をとった者は、解っていないながらこの常軌を逸した状況に戸惑い、呆けてしまうのだという。

山吹も昇月と共に起床し、月明かりの下支度を整えていると父親も起床したのか部屋にやってきて、一緒に朝食をとっていた。

「山吹」

渋い声で山吹の父親の山土<sup>やまど</sup>が山吹に話し掛ける。機嫌が悪そうな

のは単に朝だからという訳ではないのだろう。朝早く外で月光を浴びながら黙祷した後にも関わらず山土の思念は全く落ち着く事はなく、歪み、ぶれていた。

「なんだい、父さん」

初めから父親が何を言ってくるのか分かっていた山吹は軽くあしらう様に空返事をしつつ、白米を貪っている。

「父さんはやはり思うんだよ。討伐や祈祷等ではない、なにか解決する方法が。なにか別の原因が。死神などと畏怖を煽るような事は戯言なんじゃないのか？」

見たこともないし証拠も何もないだろう、と呟くと山土は味噌汁を啜る。本来なら朝日が差し込み、眩しさを覚えつつも太陽に祈りを捧げ、一日の始まりを喜びつつ明るい部屋で朝食を摂るはずだろうけれど、今は真夜中のような雰囲気陰鬱さを醸し出して、暗くない話題さえも暗くさせていた。

「じゃあ何だ、父さん。この村がこうなっているのは手掛かりも何もない、原因も分からないって言うのか。不安でも何かせずにはいられないからこうして些細な手掛かりでも頼りに動いているんじゃないか！それも無駄だって言うのか？」

俺だって…。っと小さく呟くと腰に差した日本刀の桜華を掴み、山吹は部屋を飛び出していく。ぎしぎしと音を鳴らす廊下はいつもより陰悪な音となり、後からじわじわやってくる虚無感と罪悪感に山吹は苦い表情をしていた。

山土はすっかり冷めていた朝食を摂り終えると、さっきまで山吹が座っていた所に視線を送る。

「お前の母さんは祟りや死神の呪なんかで亡くなってなんかいないんだよ。身体が弱かったんだ。母さんが居ない事の現実と真実に目を背けちゃ駄目なんだよ、山吹」

卓袱台にある二人分の朝食。綺麗に食べ終えた食器と名残の残る食器を片付け、台所で洗い終わると山土はゆるり哀愁を纏わせて祈禱場へと、三日月の灯りに照らされた廊下をゆっくりと歩いて向か

ったのだった。

それから山吹は家を出た後、考え事をしながら少しゆっくり歩いて海の家に来ていた。昨日の集会で言った通り、海の妹の渚に会う為にだ。海の住む屋敷の戸を静かに叩くと中から海の声が響いた。

「御待ちしてありました、山吹様」

海は月光に包まれる山吹を屋敷の中に促した。小さな屋敷だけでなく、住み心地の良さそうな造りで、玄関から部屋へと上がると居間が広がっており、其処に渚が居た。薄い黄色の着物を着た、少女だ。

「海、渚。朝から悪かったな」

山吹は海に持つてきた手土産を渡す。中身を見た海は「わあ、有難う御座います」と深々と頭を下げた。中身は今ではすっかり貴重になった野菜類だった。

「山吹さんっ」

黙って座っていた渚が山吹に駆け寄り、抱き着いた。海が渚を注意しようとしたが、山吹は笑顔で海を宥めた。

「山吹さんは、えっと……白い何かを、その……やっつけちゃうんですか？」

山吹は最初、いつも応援してくれる渚が何を言っているのか解らなかった。なにか躊躇している様子の渚は薄らと涙さえ浮かべている。

「あ、ああ。そのつもりで今日も渚に詳しい目撃の話聞いて、それから支度をして出掛けるつもりだったよ」

だから、よかったら詳しく聞かせてくれないかな？と渚の頭を優しく撫でながら囁いた。

「え……っとな。お兄ちゃんと山菜を採りに行つたの。その時、空を見たらなんか、雲が月に照らされた海の波みたいに見える、恐かったけれどなんとなくその蠢きが綺麗だなあって思ってた。眺めててふと金色の滝の方を見たの。そしたら真っ白の……うん。私にはね、その姿は死神とかそんな禍々しいものには見えなかった。むしろ寂



しそつだつたの……」

ふいつと山吹から視線を外すと渚は悲しそうに顔を歪めた。山吹はそんな渚の様子をみるとまた決意がぶれた気がした。朝の父親の事があつたから余計に。

山吹は渚の話してくれた事をよく心に刻み込んだ。この娘の言う事に偽りはないだろうから、繰り返し反芻しながら大切に深く深く刻み込んだ。

「ごめん、渚。山吹お兄さんはね、この村が大好きなんだ。海も渚の笑顔も俺は守りたいんだよ。其の為に必要ならその死神の討伐も躊躇しない」

言い切つた山吹は、「でもね……」と続けた。それは今まで溜め込んできた不安や感じ続けていた畏怖、弱音を吐き出す様だつた。相手が小さな女の子だからか、張つていた気持ちが一瞬ゆるりと解けていくように山吹は感じていた。

「俺はその姿を実際見たことがないし、実体の無いモノを何年も追いかけているんじゃないか、とかさ。父親の言う事の方が実は正しいんじゃないか、とかね。なあ渚、海。正義ってのは一体なんだろうな？俺の中にずっとあつた正義の定義なんてのはさ、実はもうとつくに崩壊しているんだよ」

そう言い残すと、いつの間にか用意されていたお茶を飲む。海がきつと用意してくれたのだろう。温くなつてしまつたけれど一気に飲み干せば立ち上がり、玄関に向かつていく。

「海、渚。有難うな。渚、渚の言いたかつた事は山吹お兄ちゃんに伝わつたからな。ちゃんと、正しく伝わつたと思うから、そんな悲しそうな顔はもうお止め？」

見送りに玄関までちょこちょこ付いて来ていた渚の頭を再度撫でる。渚は安心したのか可愛らしい微笑みを見せた。

「じゃあまた。村長の所まで行つて来るよ。海、山に入る時は何時もの合図をするから。渚、海兄さんを良い子で待っているんだよ。じゃあ……行つてきます」

履物を履きながら海と渚にそう言葉を紡いだ。言葉は月灯りに乗って小さな渚にも優しく届いただろう。渚もいつもの様に「お気を付けて行ってらっしゃいませ」と微笑み、その隣で海も柔らかな微笑みを送ってくれていた。二人が妙に大人びて見えたのはきつと柔らかな月灯りのせいではないんだろかなと山吹は思いながら海の屋敷を後にし、さらさらと音をたてて、風に流されながら気持ち良さそうに月灯りに淡く包まれた大きな柳の木のある村長の屋敷へと向かって歩いて行ったのだった

ゆつくりと歩を進める。そして村長の屋敷を確認すれば、碧眼の男は辺りを見渡すと、月夜の朝という異様な状況を肌で感じていた。村人は当たり前のように農作業しているし、夜行性の生物に限らず犬等の動物も活発に生活していた。しかし空には漆黒が広がっているし、当たり前のように三日月が浮かんでいる。

「御免下さい」

玄関まで行って碧眼の男は声をあげる。程なくして中から使い古したような、洪声が返ってきた。

「誰かのう？ 今行くでよ、ちょっと待つとれ」

玄関の戸がぎしぎしと唸る。徐々に開いていく中からは綺麗な青の着物姿が垣間見えた。髪も薄くなり、所々白髪混じりの貫禄あるお年寄りがゆつくりと出て来た。彼が村長で間違いないな、と碧眼の男はなんとなく雰囲気思った。

「いきなりの訪問、申し訳無いです。私、今浮き草をしていまして……。今時間宜しいですかね？ この村で起こっている異変、詳しく聞かせて頂きたくて」

村長は旅人と名乗る碧眼の男をまじまじと見る。瞳の色、深緑のしつかりした浴衣。と、村長はそこで男に対して微かな違和感を抱いた。

「そうかい。旅人のあんた、まあゆつくりしていくといい。今は丁度休んでた所なんぞでな」

年寄り独特の柔らかい物腰で旅人を中へ導く。碧眼の男も村長の御言葉甘える事にし、玄関から中へと入っていく。

中へ入ると立派な日本家屋で、一番最初に目に入るのは洒落た関節照明と、それに照らされた植物だった。それは豪華な旅館を思わせ、碧眼の男は感嘆の息を漏らした。

村長が招いたのは、畳が敷き詰められた客間だ。若い蘭草の匂いが気分を落ち着かせ、薄暗い部屋の中と差し込む月灯りが部屋のそんな雰囲気有助長していた。

「まあ、お座りよ、旅人さん」

座布団を用意してくれたので、碧眼の男は遠慮がちに座る。それを見て村長が重苦しそうに口を開いた。

「儂もたまには誰かに話を聞いてもらいたい時も、あるさね。それで旅人さん、何が聞きたいのかね？」

「主にこの月夜の事と、白い神の嘶、ですな。間違つてなければ其れは私の力になれる領域なので」

碧眼の男がそう云うと村長は目を見開き、口が自然と開いていく。  
「な、な…本当なのかね？ 一体…」

村長は焦るように急かすように言葉を紡ごうとするけれど、老いた身体あぐせくの心の臓が激しく鼓動を刻み込む。そうやって齷齪あぐせくしていると、「村長ー、入りますよ」と、山吹の声が玄関から聞こえてきた。

「村長、今日の報告なんだが…つと。なんだ珍しい。客かい？」

山吹は客間に座っている碧眼の男に視線を送ると怪訝そうな表情を作った。

「どうも。旅をしている者です。この村で起こっている異常の嘶を聞いて立ち寄ったんだが、君が噂の討伐隊なのかな？」

へえ…と火の点いていない灰色の煙草をくわえながら妖艶な微笑を浮かべる。

「いかにも討伐隊だが…村長、何故」

「何故村の長である我が家にただの旅人を招いたのか…か？」

小さな子供に問題を出すように村長は山吹を見つめると諭し始める。山吹の怪訝な表情は変わらない。

「旅人さんの知恵に頼るほど儂の体力や知識ももう、使い果てたのだよ山吹。旅人さんが云うには、この異常事態は自分の解決できる範疇みたいものだ、と言うのだ」

それはどんなに甘い言葉なのか分からないわけではあるまい？と村長は柔らかく微笑んだ。

「そ、そうでしたか…失礼しました」

納得いかないような浮かない表情で村長の隣に正座で座り込むと、ちらりと碧眼の男を見つめると押し黙ってしまった。

「さて…どこから話せばよいか。太陽が昇らなくなったのはもう何年も前だの。急にというよりも、太陽が沈んだつきりといいますかの…？ある時、朝に月が昇ってきたのですな。そりゃあもう驚きました。今じゃなれちまいましたがね」

村長は苦笑いすると小さく笑った。御伽噺を紡ぐようにゆっくりと語りだす。

「丁度その頃からですか。山に白い何かが…何かいるんですよ。死神なんて誰が云ったのか、そのまま定着してしまいましたかの」

話を聞いていた碧眼の男は一瞬眉間に皺を寄せると村長に視線を向け、足を崩すと畳の擦れる音が客間に響いた。

「村長は、その白いモノってのをどの位ちゃんと見ました？」

「ああ、その初めて月が朝に昇った日のことだがな、山で見たんだよ。霧や霞がすごかった、そんな中でね…ゆらり、ふわり、佇んだよ。なんとも云えず怖かった」

話を聞くと御馳走様と言わんばかりに立ち上がり、浴衣の裾を直す山吹と村長を一瞥する。

「話は大体わかりました。解決出来るかは期待はしないで下さい。どんな形で終焉を迎えるか、私にも正直わからないです」

失礼しますと、呟くとどこことなく機嫌悪そうに客間から出て行く。

「ちょ、ちょっと…待たれよ旅人。いきなり如何したというのだ？  
何処へ行く」

村長が焦燥しつつ足が震えるのを我慢しながら立ち上がる。

「ちょっと山へ行きます。ああ、それと…その匂いはどんなに洗っても消えやしませんよ村長」

そう云い残すと足早に屋敷を出て行ってしまった。恐らく、というか間違はなく山へと向かったのだろう。そんな碧眼の男の態度に山吹は話についていけなそうにしていたが、村長に対する無礼に気付くと怒りを隠すことはなかった。

「あの男…次にあつたら叩き切つてやろうか…。村長大丈夫ですか？」

心配そうに村長に寄り添うと村長は山吹に気付かない程に顔は青ざめていた。歯をがたがた鳴らし、手を見つめていた。漸く山吹に気付くと無理して微笑んでいるのが傍からみてもわかるくらいぎこちのない表情だった。

「あ、あ…ああ。大丈夫さ。山吹。山へ行つたあの旅人じゃがの、旅人と自称しておつたがあんな荷物の無い軽装の旅人何ぞ何処探してもおらんのじゃよ。用心して追うがいい。山の精気に当てられておつたら保護してやれな…」

そう促すと村長は奥の部屋へと向かつて弱々しく歩いていった。まいった。

村長の命令が出たときに山へ探しに行くこととなっている。それ以外は村での仕事だ。だから山に行く事よりは村の仕事の方がどちらかというときが多い。今日は山吹達にとって一週間ぶりの山となった。「そうと決まれば、集合かけねばな」

村長に了解の返事をすれば、独り言のように呟いて村長の屋敷から道を挟んで反対側へと向かう。そこには、火事などの非常時に鳴らす鐘があり、こじんまりとはしているものの、高い位置まで伸びた建物は軽く村を見渡せる程だ。山吹は上にゆらゆら浮かぶ三日月を見れば決心したように、鐘を一定の間隔で鳴らし続ける。朝の夜

月の灯りに包まれる村に、心地よい鐘の音が鳴り響いた。これは討伐隊集合の合図である。

数分後、仲間達が集まってきた。その様子を見るといつもよりちよつと少ないなと山吹は思ったが点呼を始める。

「各自並べ。そして自分の名前を言え」

「海」

「宗時」

「佐久美、えーと、すまん以上だ」

他の者はどうしたんだ？と山吹が尋ねると、殆どが畑や田圃の仕事の手を放せないのだそうだ。其の中でも数人は体調不良を訴えているらしい。

「体調不良？まさか、目から痛みが全身に巡るあの奇病じゃないだろうな？」

山吹は心配そうに尋ねる。奇病、と云うのも丁度太陽が昇ってこなくなつてから流行つたもので、村人達は死神の呪だと騒いでいる。「そのまさかです山吹様。今日は診療所の患者達も痛みが疼くのだそうなんです」

大事をとって休んでもらったほうが懸命でしょうね、と海が暗い表情で呟く。

「なあ、山吹。俺もなんだか妙に胸騒ぎがするんだよな。別に満月って訳でもないんだけどな」

そう宗時が山吹に話しかけると隣から佐久美が乗り出してくる。

「ああ、俺もだぜ宗時。狩人の腕がこんなに唸るなんざ、あのばかみたいに巨大な猪を撃つた時以来だぜ」

がしゃん、と音を立てる佐久美の火縄銃はしっかりと肩に担がれている。

「実は俺も妙な感覚になつている。正直胸騒ぎというより山のあまりに強い生命の匂いに吐き気がする…。ああそうだ、今日は山に旅人が入ってしまったている。解決できるかもと言っていたらしいが…まあ月も陰ってきていて危険だから見つけたら保護するように」

仲間の粹な声を浴びた山吹は、雲で陰りだした三日月がふわりと浮かび、金色の水をひたすらに流れ落とす山に向き合った。患者たちや、仲間の事が心配で不安になりながらも山吹達は山へと向かうことにした

月。月夜。闇夜。山に照らしつける三日月の淡い灯り、昼の月光を浴びようと動植物は蠢く。

丁度月は真上、昼近くはなっただろう時間に、登山に疲れたのか、碧眼の男は金色の滝が近くに見える小さな池の畔に座っていた。

「流石にこの噎せ返る山の生命力の匂いと沢山の吐息は目が眩む。異常事態…ねえ」

どこか辟易そうにしつつ片足を池に突っ込んでいる。

山道は、地元の村人でも簡単には進めない程激しい坂や、泥濘ぬかるみ、斜面を這ってここまでできた。しかし歩きながらの景色や月はやはり珍しい綺麗だったなと碧眼の男は静かに微笑んだ。

「其処に居るんだろう？何もしないから、出て来ないか？話したいんだ」

唐突に碧眼の男は、依然金色の滝から視線を外さないでどこかへ向けて声をあげた。

男の周りには綺麗な深緑の器が幾つか置かれていて、中に盛られた様々な混合粉末に火を付けているのか、御香のようにゆらゆらと月へ向かって煙が上がっていた。其の時ふと、煙が蛇行した。

「…よくきた」

碧眼の男はゆっくり振り返る。深緑の浴衣の袖から灰色の煙草を取り出して火を付ける。吐き出した紫煙と御香の煙が混ざり合って漂い、徐々に薄れていく。

三日月の灯りに照らされているとはいえ、薄暗い山の中なので視界は良くない。それでも碧眼の男は、その姿を捉えると目を見開いた。

目の前の光景に理解するのに時間が掛かった。天使が目の前に居る、とさえ思った程だ。どう表現したらいいのか、男は解らずにいた。

碧眼の男が視線を送る先には、人間がいた。年端も行かない少女だった。闇に、闇夜に包まれた世界に其処だけが異様に白かった。艶やかな白い髪、瞳の色は鮮やかな紅蓮の赤。それに雪を思わせる儂げな色の浴衣を着ていて、あどけない表情で此方を見ている。少女の綺麗な足はぼろぼろで、裸足だった。男はあまりに痛々しい姿に見えていられなくなった。

「言葉、解るか？」

男の問い掛けに少女は小さく頷く。怯えたような、警戒心が空気を伝ってくる。

「辛かった…だろう。よく来てくれたな。おいで？君の痛みの全てを癒やせはしないけれど」

立ち上がり、手を軽く広げると男は微笑んだ。少女の顔が悲痛や悲しみ、哀愁感に染まり、歪んでいく。長いこと隠し、嘘を付き、消し去っていた堪えきれない程の想いはやがて溢れ、涙となって少女の頬を伝う。

「…っっ」

少女はこうして何度独りで涙を流しただろう。何度独りで堪えて我慢してきたのだろう。次第に泣きじゃくり喘ぐ少女に歩み寄り、硝子細工を扱うように碧眼の男は少女を優しく抱き締めた。長い間張っていた気が緩んだのか、声をあげて深緑に顔を埋め、幼い少女は泣き出したのだった。

孤独の闇。恐怖の夜。年端も行かない少女を支配した黒い感情は次第に心を蝕んでいった。

少女の名前は白雪と云う。先天的に髪は正に雪の如く白く、その瞳は燃え盛る炎の如し灼眼だった。



生まれつきに神力と呼ばれる異形の中の異形の力が流れていて、少女を司っている神力によって先天的に身体の色素が抜け落ちてしまっていた。

劣性遺伝や突然変異によって発現するアルビノとは違ったものの、白雪の生まれた村では差別の対象になってしまい、次第に扱いが酷くなっていく差別に命に関わると判断した親が、泣く泣く遠くへと白雪を逃したのだそうだ。

白き者や物はしばしば神聖なもの、あるいは逆に凶兆とされ、信仰の対象として畏れられる。その影響をこの少女は幼い内に、それも生まれてからずっと迫害という形で受けてしまっていたのだ。

独りで逃げ惑って辿り着いたこの山で、白雪は暫く暮らした。人目を避け、凶器を持った狂気に満ちた村人に追われながらもずっと、幾年も。

孤独に一人、闇夜の中で耐えながら。

碧眼の男は泣きじゃくる白雪の口から紡がれる凄惨な過去を只黙って聞くと抱き締め続けた。陰る三日月の灯りの下、優しい光に包まれてもう大丈夫だと、言い聞かせるように

一方山吹達は山を登り、散策していた。時には獣道でさえ構わず進んでいく。今日は人数も少なかったので全員纏まって進んでいた。「山吹、昨日の晩は満月だったのに今日の明け方昇った月は三日月なんて、こんな事今まであったか？」

宗時は左手を小刀の柄に手を置きながら月を見上げつつ山吹に問い掛けた。

「そうだな。数年の月欠けの記録はないから曖昧だけれど、確か前の晩が鮮やかな満月で、初めて朝に月が昇った時は三日月だった気がする」

宗時は「そうだったっけか」と呟けば三日月を見上げつつ歩を進める。

「でもよ、皆感じてるだろ？今日の山はなんか様子がおかしいってよ」

佐久美が妖艶な笑みを浮かべると肩に背負った火縄銃を背負い直した。

「はい、僕も正直胸騒ぎが山に入ってから更に強くなりました」

海も佐久美に続いて呟いた。景色や月は何も変わらないのに、山吹達は確かな異変を肌で感じていた。薄暗い山中は不気味さを増して尚其処に在り続ける。

「これ、皆さん奥歯に挟んでいて下さい」

海は唐突に持ってきていた巾着袋から小さな木の実を取り出した。

「それは…苦蟲<sup>にがむし</sup>か、海」

苦蟲とは、夜闇村で採れる薬草の一種で、村では漢方にも使われる。

「かなり気が遠くなりそうになった時や、意識が朦朧としたときに奥歯で噛んで下さい」

海はそれぞれに渡す。各自奥歯に挟むと宗時が早速「うわっ、苦っ」と喚いた。山吹は苦笑いしながら首を傾げる。

「海が、意識朦朧としたらと言ってただろ、馬鹿かお前は」

宗時は渋い顔をしてる中、小さな笑いが山吹達を包み込んだ。入山した時から付きまとっていた不安な気持ち<sup>きもち</sup>が宗時の御陰で、風と一緒に消えていった気がした。

「もう少し進んだ所に池があって綺麗な場所があるから、其処まで散策したら一旦休憩にしよう」

山吹がそう声を掛けると皆嬉しそうに喜んだ。嶮<sup>けわ</sup>しい登山は、容易に山吹達の体力を奪っていく。休憩という言葉は蜜の味だった。

「そういえばよ、山吹」

佐久美が泥濘に氣をとられつつ問う。いつもどこかおどけている印象の佐久美とは雰囲気<sup>けい気</sup>が少し違った声色だった。

「よく思っていたんだけどよ、何時も村長つてなにをしてんだ？」  
山吹は知ってるのか、と何の気なしに聞いてきた。山吹は返答に困った。何も知らなかったからだ。

「いえ、そういえば何も知らないですね」

「山吹ですら、か？まあ別にいいけどよ」

聞いてきた割に佐久美は素っ気無く話を終わらせた。全員意味が分からずに首を傾げるばかりだった。

そうしている内に目的地の池がある場所が見えてきた。一步一步踏みしめる大地は妙に湿っぽかったけれど目前にすると俄然足が進む。

そして到着したその時。

「……えっ？」

思考が止まった。山吹は今自分の状況を把握する脳の演算能力さえも麻痺していた。目の前の光景は其れに陥るのに十分だった。

只々白い。闇夜に浮かぶ、逸脱した白さ。そして灼熱の紅蓮瞳。

静かに脳の中のシナプスが回路を繋ぎ始めた。少しずつ自分が今理解が追いつかない程のモノに遭遇してしまった事を理解し始めてきてしまっていた。

恐怖。畏怖。ヒトは理解出来ない物をいつだって恐怖して勝手に怪異としてきた。今も。

「ひっ…死、死神…」

海も膝が笑い、尻餅をつく。宗時ですら顔を引きつらせている。

山吹は混乱する頭のまま言葉を紡ぐ。

「た、旅人。これはどうゆう事なんだ…なぜお前がソレの側に居るんだよ！」

山吹は震える腕で日本刀に手をかけるその手つきは恐怖で、素人を思わせる程に出鱈目なものだった。すると碧眼の男がゆっくりと口を開き紡ぐ。

「皮肉なもんだな」

山吹達は怪訝な表情で碧眼の男を睨み付ける。三日月を覆っていた雲は晴れて、月灯りが降り注ぐ。

「御前様方がずっと追ってきたのは何の罪もない年端も行かないこんな幼い少女だったんだからな」

山吹ははつとした。自然とある言葉が耳に引っかった。

「なんの罪もない……だと？」

「ああ、無実だ」

「しかし、その、死神が」

その時激しく翡翠の瞳が空気が歪めてしまう程に鋭くなった。山吹達の気のせいかも知れないが、一瞬強い風が吹いた。池には波紋が生まれ、木々は何かの力に煽られて、揺れた。

「二度とその言葉を紡ぐな」

あまりの迫力に山吹は言葉を飲み込んだ。人間にできる芸当とは到底思えなかった。薄らと滲む額に浮かんだ油汗が気持ち悪かった。「悠久の夜。これは確かにこの少女が引き起こしている。けれど、だ。その原因を作ったのはあんた方の村長で間違いないんだよ」

「な、なんだって？」

山吹は口を半開きにして聞き返した。海も漸く落ち着いてきたのかちゃんと碧眼の男の話を聞いている。少女は碧眼の男の後ろに回りこみ、強く目を瞑りながらしがみ付いて震えていた。

「よく聞いてくれ。これは嘘ではない話だ。」

男は落ち着いた口調で少女の過去を分かりやすく説明した上で数年前の物語を紡ぎ始めた。

「白雪はこの山に辿り着いて追い詰められつつも生活を始めた。そんな時だ。恐らく手にした日本刀が強く呪われていたんだろう、年老いた男が狂気に満ちた形相で綺麗に月光の反射する日本刀を其処に偶々いた少女の背中に突き立て、切り付けた。酷い傷だった。今でも背中にはその痣が残っている。其の時に、押さえ込めていた異形なる神の力が暴走した」

今も続く闇夜はその力の影響なんだよ、と碧眼の男は続けた。

混乱する山吹達は一応は理解をした。あまりの事に目を背けたくなったが、どうやら事実らしく、山吹の身体はがたと震えていた。

「で、では本当に俺は…なんの罪もない少女をつつ…？」

齒を食い縛りながら耐えたけれど溢れる涙は頬伝う。山吹は自責の念に押しつぶされそうになりながらも必死に頭を下げた。

「謝って済むことでは…ないが、すまない…すまなかった。長い間すまなかった…」

山吹は声を上げて泣いた。今までの溜まりに溜まった感情が流れ出して止まらなかった。其の時だった。

辺りにふと焦げたような、そんな匂いが立ち込めた。山吹が火薬の匂いだと気付いた時にはもう既に遅かった。

「うわあああああつ…」

佐久美が錯乱していた。苦蟲の殻が側に落ちていた。無意識に、ずっと撃つと気構えていた積年んの感情が暴走したのだった。佐久美は、泣いていた。静かに、されど激しく泣いていた。点火してしまっていた。

「佐久美さんつつやめつ…」

海の叫びも虚しく、弾丸が少女に向かって空気を切り、火薬の爆発の加速で突き進んだ。一瞬の出来事だった。辺りに鮮血が飛び散った。

「うあ…ああ…」

白雪と名を持つ少女は碧眼の男に寄り添い、撫でた。涙を流しながら必死に血だらけの手を握っていた。

白雪を庇った碧眼の男の左手を火縄銃から放たれた弾丸が貫通していた。男は苦痛で顔を歪める。

「真実から目を背けちゃ駄目なんだ…山吹、だったか。自分でもよく解っているんだろう？」

痛みに耐えながらも言葉を紡ぐ。袖から灰色の煙草を取り出すと

火をつける。ゆつくりと紫煙を吐くと佐久美に寄り添い宿める海に身体を向ける。

「終わらない夜は俺がなんとかしてやる。お前らはする事があるだろう…行けっ…」

早く戻れ、と声をあげた碧眼の男の指示通りに、山吹達は動いた。何度も何度も頭を下げ、泣きながら下山していった。村長の日本刀を見つけ破壊すべく。

碧眼の男はふと力が抜けたように白雪に凭れ掛かった。そして独り事のように静かに呟きながら目を瞑る。

「こつゆうの、改めて思うが、がらじゃないな本当…」

溜息交じりに微笑んでいた男を見て、白雪はその意味を良く解らずに首を傾げていた。

「白雪、先程説明した通り…出来るか？」

まだ泣きじやくる白雪の頭を優しく撫でる。安心したのか、男に對して初めて微笑んで、ゆつくりと浴衣をはだけさせ、背中を向けた。三日月の灯りが闇夜を切り裂き、辺りをふわふわと優しい灯りで包み込んだ。

「笑えるんだな。白雪。笑えるのなら笑っていたほうがいい」

碧眼の男は白雪の背中に傷のない右の手を翳すと、静かに目を閉じて背中に触れ、月の灯りを浴びながらゆつくりと言葉を紡いだ

村に着いた討伐隊はすぐさま村長の屋敷に向かった。戸を叩いても返事がなかったたので奥の部屋にいるのだろうと山吹の推測によって、全員警戒しつつ向かった。

部屋の戸を開くと、呪われた日本刀に縋<sup>すが</sup>っていた村長が居た。息は薄く、心の臓は動くのを躊躇っていた。

「山吹…村長は多分あの例の夜以降、この日本刀を手にした時にはもう、心を奪われ乗っ取られていたのかもしれないな」

ぐったりしていた村長を佐久美と宗時が布団の敷かれた部屋へと

運び、安静にさせる。その間に、山吹

と海は呪われたと云う日本刀を山土に被ってもらい、その後桜華で滅して、埋葬していた。徐々に顔色がよくなる村長を見て、山吹達はほっと胸を撫で下ろした。

それから時間が流れ、村を照らす月は沈んで、また半欠けの月が昇り、沈む。そうして何時もと変わらなく一日が終わる。

其の時だった。村を眩い光が照らしつけた。山から顔を出す光の塊は無条件に暖かみを孕んだ色を撒き散らす。

太陽が昇ってきていた。辺りは月夜の暗闇の中では見えなかった色彩で溢れかえり、色濃く村を彩っていく。

起きてきた村人は数年ぶりの太陽に涙し、拝んだ。山土も黙禱を中断し、太陽を見上げ手を合わせる。其の隣に疲れ果てながらも太陽に拝む山吹の姿もあった。

数十分後、程なくして山吹は宗時と海に会った。

「あの時の旅人と少女は無事なのだろうか。太陽が昇ったと云う事は、やはり解決してくれたのだな、あの翡翠の瞳をした旅人は」

数年ぶりの朝日を浴びながら宗時と海に問いかける。

「ですね。あの方の手の傷も心配ですし、なにより女の子にきちんと謝りたかったなあ」

「まさかこのまま立ち寄らないなんてないよな？俺は村を救った人をもてなしたいし、感謝に気持ちを伝えたい」

山吹はなんとなく感じていた。もう碧眼の旅人は立ち寄らないだろう、と。しかし待ち続けたと思う。やはり村を救った、解決してくれた恩人の事を忘れるなど、到底無理な話だ。

「いつかまたふらつと来るといいな。其の時まで夜闇村、いや…日<sup>ひ</sup>之出村をもつといい村にしよう」

悩みから開放された山吹達は心の底から笑顔になった。眩しすぎて目が眩む程に太陽の光を全身で感じながら。

「背中の人墨の痛みは収まってきたか？」

隣に居る透き通る白髪の少女、白雪はこくと小さく頷く。

「あ、ありがとう……」

碧眼の男が白雪の背中に彫った鮮やかな人墨模様は暴走した神力を抑える為に必要だった。依然傷の残る背中を、静かに、撫でた。桜色の着物を着た白雪の頬が桃色に染まった。

「……毎日がすごく怖かったの。どうにかいい方向にもっていこうとしたんだけど……。やっぱりどうしようもなくて、どうにもならなくって……」

物憂げな視線が碧眼の男に向かって注がれる。男は太陽に照らされながら目を細め、黙って聞いている。

「もういつそのまま果てのない闇を彷徨う影になってもいいとさえ、私は思っていたの……」

「なら一緒にくるか」

「えっ？」

白雪は目をぱちぱちさせて、碧眼の男の言葉の甘い、甘すぎて脳が痺れるその意味を反芻していた。

「でも、でも……私が一緒だと、迷惑になる……んだよ？」

「此処じゃない、遠い所のある場所だがな白雪。長い間、何百年も孤独だった水神がいた。小さな社の神だったけれどな、その神の強い想いは積年の願いをとうとう自分のものにした。まあ今はゆっくり眠っているんだがな」

白雪はいきなりされた話を理解できずにいた。きょとんと首を傾げた。

「望みを捨てるな。白雪がもう大丈夫と云う其の時まで、一緒に過ごそう」

「……っつ。うあーん……」

一緒に居たい……と泣きながら小さく呟いた白雪の頭を撫でると包帯を巻いた手で灰色の煙草を深く吸い込んだ。

「雪」



白雪を呼ぶその声は、白雪にとって空に浮かぶ太陽よりも明るく暖かくて、望みに満ち溢れていた。闇夜を照らす月を懐かしみつつ、白雪のように真っ白い髪をなびかせると桜色の着物を着た少女は涙を拭って、碧眼の男の元へと可愛らしく微笑みながら小走りで向かった。

月によって金色になっていた滝は、今は太陽を反射して白銀色に光り輝き、歩き出した少女の目の前の世界を真っ白く、雪花火のよ  
うな光景に包んでいく。其の中で、碧眼の優しい微笑みが少女を月のように淡く包みこんでくれていたのだった。

## 第弐話 夜を連れた白い月（後書き）

水域です。

本当はこの半分位で終えるはずだったのに長くなってしまいました。

今回はシリアスといいますが、ちょっぴり息を呑む展開となりました。山吹達の、討伐に対する不信心と現状の不安感。そして白雪の想い。

ヒトの暖かみを知った白雪の心は春のように色鮮やかになっている事を願います。

夜闇村、行ってみたいです。朝に昇る月と金色の滝はさぞ幻想的なでしょうね。

## 第参話 雪、芽吹く春（前書き）

冬の山は寒くて厳しく、其れでいて山の光景は言葉を失う程に美しく儚い。

ふわりと降る雪は集落を包み込み、全てを真っ白に彩る。

そんな厳かで静かな山にはとある嘸がある。

「神隠し」と「美しき奇跡」だ。

これはそんな山の中で暮らす姉妹の嘸。

## 第参話 雪、芽吹く春

雪が踊るように舞う。深々と、静寂の中仄かな音が緩やかに流れる水のように染み渡り、辺りを包み込む。

周りに生えている緑鮮やかな木々達の葉はもう既に枯れ落ちていて、物憂げな景色を彷彿させる晩秋はあつという間に過ぎ去り、何時しか雪がふわふわと辺り一面に降り積もっていた。

雪が降りかかるその風景は、何もかもが真っ白に染められ、穢れの無い浄化された世界を思わせた。

土、草、木。山に、川も全て。雪が其れらを砂糖菓子のように真っ白く彩り、道行く人々が見蕩れて思わず綺麗と呟いてしまうそんな言の葉は、この果て無き白の幻想的な雪景色を目の前にした人なら無意識に紡いでしまう。

無数の雪が優しくも、ふわり風に吹かれて舞っている影響からか、日の光は満足に届かずに雪に遮られていて、太陽が真上に昇っているというのにほんの少し薄暗い景色となっていた。

光が遮られているのが影響してか気温は酷く低く、そんな寒空の中で肌を出そうものなら寒さの感覚を通り過ぎて痛く感じてしまう。そして長く外気に晒していると神経的に麻痺を起こして凍傷になってしまう。そんな寒さの中、着物姿に布を被っただけの容姿の女の娘は、吐息を白く染めながら山道を足早に歩を進めていた。

「何度みても綺麗な景色…けれど、ううう…やっぱり寒いなあ」

そう心底寒そうに身体を擦りながら呟くその女の名前は繭まゆという。歳は十六で、胸にかかる位の長さの薄茶色の髪は一つに束ねられていて、耳の辺りから胸の方へ流れるように結つてある。

繭は山の小さな集落で、まだ七つの小さな妹の夕ゆうと今は二人で生活をしている。

繭の両親は、夕が三歳になった頃に雪山での仕事の途中で雪崩に巻き込まれてしまい、無念にも繭と夕を残してこの世を去ってしまった。

っていた。

繭の家は財産はあまりあるほうとはいえず、精神的にも体力面でも辛かったのだが、必然的に繭は夕を養う形となる。春から秋口にかけて畑や田圃で野良仕事に精を出し、夜は機織はたおりで自分達の衣類や売却の為に遮二無二働いていた。

そして冬の間は、蓄えた農作物や米で餓えを凌ぐ。繭と夕が住むこの山の集落の辺りは昔から降雪量が非常に多く、一日で膝が隠れてしまう程積もる事も儘ある為、この集落の人々は冬の間は極力外には出ない様にする。

それでもやはり外出しなければならない用事もあるし、内職した物も売りに出掛けなければならぬ人もいる。その為、建物にとある仕掛けが施してある。この辺りの住居は雪圧の関係上大体一階建ての家なのだが、屋根から外へ出る為の扉がある。冬用の隠し扉だ。通常の玄関が雪で埋まった時に使うその扉は、雪山に住まう人々の昔ながらの知恵だった。

繭は冬の間も継続して機織で織る反物や着物を売りに、山を降りた麓から一番近い村に出向いた帰りだった。そこで稼いだ金を懐に大切にしまい、その村で調達した食料や機織に必要な物を大きな風呂敷に包み、背中に背負っていた。

その荷物は華奢な身体には辛い荷物と過酷な雪道だったけれど、家で待っている幼い妹を思うと自然と疲労で重くなった足は前へと進んでくれたのだった。

「此れなら今年はまだ春まで外に出なくっても、大丈夫かも」

空を仰いだ顔にふわふわと降り注ぐ細かい雪は繭の体温を容易く奪っていくけれど、繭は静かに微笑み荷物を背負い直す。

暫く歩いて漸く見えてきた我が家は雪に彩られ、少し埋まってしまっている。そんな見慣れた光景の其処には大事な妹の夕が待っていている。ふと訪れた安堵感疲労をも一緒に連れてきて、今更ながら流石に疲労を感じ、繭は息を整えようと真上に上った太陽を

手を翳しながら眺めながら静かに深く呼吸したのだった

「寒いなあ、繭お姉ちゃん大丈夫かなあ」

「<sup>もたら</sup>囲炉裏の中で揺らめく火の暖かみは、夕に些細ながらも安堵感を齎していた。姉の居ない冬山での孤独にはまだ慣れていない幼い夕は、やはりどこか落ち着かない様子だった。

この姉妹の住む家の間取りはとても簡素なものだ。玄関を開けるとすぐに居間がある。板張りの壁には両親と繭、産まれたばかりの夕の写真が飾られている。

二人は殆どの時間をこの居間で過ごしていた。後は寝室や物置部屋、浴室と便所があるだけの至って普通か、他の家屋の其れよりも少し劣る家屋だったが姉妹は今の暮らしに満足していたし、何より実家と云う存在は心にゆとりや和みを生むものだ。まだ幼い二人にとって、落ち着ける大切な場所だった。

「きつともうすぐ帰ってくる。よし、繭お姉ちゃん寒くって凍えるだろうから、夕が何か暖かい物作っただけよーと」

夕は、囲炉裏からくる離れがたい温もりを名残惜しそうに眺めるも元氣良く立ち上がり、にこつと微笑んだ。雪が降る山道を荷物を背負って歩いてくる姉を想うと、いてもたってもいられなくなったのだ。

ふと台所に視線を送る。なんの材料が残っていたかな、何を作るのかなと考えていると知らず知らずの内に涎が垂れてきて慌てて拭く。誰も居ないと解ってるけれど、見られていないか辺りを確認し顔を赤らめて、とてとと台所へと歩いていく。ぎしぎしと音を立てる床は寒さのせいか痛々しく鳴り響き、冬の厳しさを感じさせる乾いた音は居間に響いた。

台所には、綺麗には整理整頓された道具が並んでいた。姉がいつも料理を作る時に使っていて大切にしている為、錆びもなく良く手入れされていた。

台所の傍らには、野菜が入った籠が置いてある。物置にもまだ沢山あるのだが、使う分等幾らかは台所に置いておく習慣がある。並べられた野菜を見ると、どうやらスープを作るのに十分な種類と量があるようだ。

「うん、よし。夕が野菜のスープを作って、繭お姉ちゃんに暖まってもらうんだー」

慣れない手付きで色とりどりの野菜を籠から取り出す。橙が鮮やかな人参、しっかりした馬鈴薯じゃがいもに、ぎつしり黄身が実った玉蜀黍とうもろこし。その野菜達を並べると夕の無垢な笑顔が台所にふわり咲いた。凍えるような温度の室内は依然として低いままだけれど、其処だけはほんのり暖かった。

野菜を切る。これだけでも小さな夕には凄い事なのだった。姉の繭の御飯の支度の時には夕も手伝いはするが、包丁はまだ危ないからと持たせてもらえなかったから、これが実質初めての調理である。「確かね、繭お姉ちゃんね…こう、こうやって切ってたよね？」人参を手頃な大きさに切る。たったそれだけの作業だけれど危うい手つきで調理する幼い夕の姿は、見守る保護者がいたならば止めに入っていたかもしれない。あまりにも切り方が危なく、指を切る寸前で包丁がまな板を乾いた音で小気味よく鳴らしていた。

何とか切ることが出来た野菜を眺めると、夕は得意げに微笑む。自分にだって誰かの為に何かを出来るんだーっと思うと自然と笑みがこぼれるのだった。

「これは出来る…火をこうやって、こう…あちっ！あうー…」

調理を始めて二十分と少し。歪に切られた野菜達はまな板の上。居間の真ん中に器用に組まれた薪の上部に吊るされた鍋には湯気が立ち始めている。薪を組み上げ方は繭に教えてもらってよく手伝っていた為、夕はそつ無くこなして火を付けていた。言うまでも無く、軽く火傷してしまうくらいにはその着火も実に危なっかしかったのだが。

沸騰する少し手前で投入した野菜達は、お湯の中で色とりどりに

舞う。夕はそれを眺めると満足げに微笑んでいた。

「えへへへ、なんとかできそうかも……」

寒い思いをしている姉の繭の事を思い浮かべて、暖かく湯気が昇る鍋に味付けをしていく。料理は、食べて欲しい相手の事を想えば想った分だけ美味しくなるんだよ、と繭から教わった事があった。だからこの野菜のスープはきっと美味しいはず、と夕は信じて疑わなかった。姉の事を考えながら丁寧に味付けをしていた、其の時だった。

「……？」

居間の窓から差し込む太陽の光はもう直に真上に昇りきる頃。天井にある、冬用の扉も雪溶けの雫に太陽が反射していきらきりと眩しい。ふと見上げた天井の扉に夕は微かに違和感を感じた。

それはほんの些細な、それでいて妙に気になる違和感だった。例えば今迄そこにあった物が無くなっているようにふと気になった時でも何が無くなったのか、それが思い出せなかったり。

例えば、其れとしか認識していなかったモノがよく見てみると実際には違って見えたモノだったり、とか。現実的ではないなにかが起こっていたとしたらならば。

夕はその些細な違和感を確かめずにはいられなくなった。料理の火もそのままに覚束無い手付きで徐に天井へと梯子を掛け、ゆっくり昇っていき、扉を開けて入ってくる色彩情報に目を凝らす。

「……えっ　？」

ぱきつと、小さな音は部屋に響いた。

窓からは、真上に昇った太陽の光が遠慮も無く差し込んでいる。隙間風に揺られて緩やかに湯気が踊り、ことごと美味しそうに煮込まれている野菜のスープと、散らかった野菜の皮、調理道具。そして天井にかかったままの梯子があるこの空間だけが、不変である筈の流れゆく時間に取り残されたかのように只其処に存在していた。



「夕、待ちくたびれているだろうな」

我が家の玄関の前に立つと繭は一仕事終えた充実感でいっぱいだった。待つてくれていた妹の為に美味しい料理を作つてあげなきゃと、雪で少し重くなつた玄関を静かに開けた。

「夕、ただいー……え……？」

繭は目の前の光景に言葉を失い、首を傾げていた。立ち尽くした繭の背中からは、大事に背負っていた荷物がずるりと落ち、木の床からは乾いた音をたてて部屋に響いた。

居るはずの、繭の帰りを待つ妹の姿が何処を探しても見つからなかったのだ。

家の中は全て探した。驚いてしまったけれど最初は悪戯して隠れているんだろうななんて、大した危機感も無しに探してた繭だったが、探す箇所が減つていく内に顔が蒼白していくのが自分でもわかった。

「料理……？ついさっきまで料理してたの……？」

丁度いい火加減で鍋から湯気が昇っている。夕が外から帰つてきた自分の為にこさえてくれたのかと思うと、つぶらな瞳に泪が浮かんだ。夕の優しさが嬉しかった。けれど今は不安や心配で泪が溢れる事に気付くと、身体の力が抜けて無くなつていき、ぺたんくと床に座り込んでしまった。

「夕……一体何処へ行つてしまったの……」

繭はそう小さく呟くと、虚ろに惑う瞳に梯子が映った。というか、家を探している時に何故此れに気付かなかったのかと気付いた刹那心臓が激しく波打った。

「嘘……まさか一人で梯子を使つて外に……？」

力の抜けてしまった身体で梯子まで這いずつていく。ひんやりとした冷たい床でさえ気にならない程に繭は動揺していた。

そして嫌な予感の其れはとうとう確信へと変わってしまった。

外へ通じる扉が、開いているはずの無い扉が少し開いていたのだ。冬の間、一人で梯子を登ってはいけなないと夕には口を酸っぱくして教えていて、今までそれを守っていたというのに、だ。

途端に扉へと向かう。少し錆びの匂いがする梯子から落ち掛けるのも気にしない勢いで駆け上り、ぎしつと音をたてる扉を開く。目が眩むほどの光は雪に反射して更に眩く網膜を激しく刺激する。身体半分を冷たい雪が降る外へ晒す。吹き付ける風はさっきまで歩いていた時よりも寒く感じて、容易く繭の体温を奪っていく。

「嘘…でしょ」

そう呟けば繭は言葉を失った。

目の前の景色は雪に包まれて真っ白、他の色など見当たらない鮮やかな白だった。そして、あるはずだと思っていた小さな足跡はそこにはなかった。

あれから繭は茫然となりながらも、梯子を降りて程よく暖まった部屋に戻り、掻き乱れた脳の整理をしていた。

この厳しい寒さの真冬に妹の夕の姿が見えない。その事実には繭の思考を容易く鈍らせる。

「神隠し………」

どのくらいの時間をこうしていたのだろうか。脱力感、無力感を繭は華奢な身体で受け続けていた。後にやってきたのは虚無感、不安。気付けば時間は無情にも過ぎ去っていく。

「私がこうしている場合じゃない…のに」

その間に夕は一人で寒さの中泣いているかもしれない。幼い妹はとても甘えん坊で泣き虫だ。突如焦燥感に苛まれると立ち上がり、外に冬の間は除雪を生業とする人達が今さっき近くにいた事を思い出すと、繭は泣き出しそうになる気持ちを無理矢理抑えつけて玄關から勢いよく飛び出した。

雪山に住むにあたって懸念される降雪量と、その除雪。冬以外は

他の仕事をしている男連中は、大概雪が降る季節になると集まって除雪をして働く。何人かの集団を作ってそれぞれ散らばり、集落に積もった雪を除雪する。雪匙ゆさじと呼ばれる道具を使って、雪を削ったり抉り出したりするのだ。

その作業はかなり体力がいるし筋肉も使う為、基本的に丈夫な男が集まる。

今、登山して家につくまでの道中、丁度繭の住む家の辺りで雪匙を使って作業している男達の姿があった。

そこで集団を統括していた男の名前は鷹たかという。歳はまだ若くて二十四。仕事柄やはり筋肉質で、髪は短く爽やかである。

手際良く雪を抉り出していき、仲間達にも指示を飛ばす鷹の姿が目に入った繭は途中何度も雪に足を滑らせても、我を忘れて走り寄った。

「た、鷹さんっ！」

鷹は、雪の中を薄着で駆け抜けてきた女の子のあまりに険しい表情に、ただならぬ何かを感じた。

「おお、どうしたんだ？そんなに慌てて、何があった」

「鷹さんっ、あ…あの、妹が、梯子で！消えてて、料理があつて、それで…それで…」

「繭、一旦ちよつと落ち着こか」

繭が必死に紡ぐ言葉は支離滅裂、伝えたいのに気持ちだけが先走って上手く言葉に出来ていなかった。鷹はまず落ち着くように繭の頭をそつと撫でると、幾らか落ち着きを取り戻した。

「私、山を降りて生活物資の調達をしてきたんです。それで帰ってきたら、さっきまで居た形跡はあるのに妹の姿が…無くって…何処を捜してもいなくて…」

「な…まさか神隠し…そりや大変だ…」

鷹が声をかけると周りの男達が集まってくる。事情を説明すると、ざわざわとお互いの顔を見ては首を傾げている。

「今日はずつと此処で仕事してたけど見なかったけどなあ」

「ああ、見なかった」

「でも繭ちゃんと夕ちゃんの家からは薪の煙昇ってたからてつきり夕ちゃん居ると思っていたけれど」

数人の男達は口々にそう言うつと繭は酷く悲しそうに、顔を歪ませた。そんな繭を心配そうに鷹は見つめ、今日の事を落ち着いて反芻した。

「繭、俺は今日本当に此処で仕事してたからこれは断言出来るんだけれど…屋根の扉からも玄関からも、夕の姿は見えていないんだ」

「じゃあ夕は、私の妹は一体何処に行ってしまったんですか！」

鷹が呟いた言葉を聞くや否や繭は声を荒げた。不安からか、息も荒く肩で息をしている。そして理不尽に怒鳴っていた事に気付くと「ご免なさい…」と小さく呟き俯いた。

鷹は繭の事も夕の事もよく知っていて、親が亡くなってしまっ  
てからも兄弟のように接してきた為、夕が居ないという事実は鷹自身も酷く胸が痛くなっていた。段々と現実を理解すると皆焦燥感に  
駆られ始める。

「おい皆、仕事は一旦止めだ。この集落に住む人に伝えて兎に角全員で捜そう」

小さな集落なので、一人が困ったら全員で助け合い、一人が不安に打ちひしがれているなら全員で何とかする。一人が幸せそうに笑  
つていればつられて皆が微笑む。此処は暖かい集落なのだった。改  
めてその暖かさに触れた繭は、何度拭つても頬を伝う涙を止める事  
など出来なかった。

幾らかの時が経ち、傾いた太陽が空を橙色に彩り始めた頃には既に集落中に広まり、集落皆での捜索が行われていた。

繭達姉妹の家は勿論、近辺に埋まってしまうていないか。広範囲で丁寧に慎重に捜しても、夕の姿どころか手掛かりさえも見つからなかった。たったの一つも。

そうしている内に、橙色の空に薄く雲が包みこみ、止んでいた雪

もまた静かに降り始めた。

冬の夕方は言うまでも無く早く暗くなる。ましてや山の曇りなら尚更だ。冬山の夜は大変危険だということは全員が承知だった。

「繭、俺はもう少し捜してみるけれど…このまま夜になると二次災害も懸念されとかで一旦解散になっちまった…すまない」

周りを見れば疎らだった人達も申し訳なさそうに退散していくのが見える。繭は悲しそうに見れば搜索してくれた事に感謝し、そして祈るように俯いた。

「夕…」

「繭、俺の他にも体力的にもまだ大丈夫そんな奴を連れてもうちょっとと捜す。繭はもう家に入ってな」

「そんな！私も捜します、捜させて下さい！御願い…何かしてないと不安に押し潰されちゃう…」

段々と黒味を増して、暗くなりだした空は悲壮感を助長させ、焦りや不安が心を支配してしまう。

泣き出しそうな表情の顔で鷹を見据えると繭はそう訴えた。正に悲痛そのものだった。

「繭、気持ちは痛いほど解る。でももし、暗い中夕が帰ってきたとき家に繭が居なかったら寂しいに決まってるだろう？」

頭を優しく撫で、諭すように繭を説得すると渋々だけれど小さく首を縦に振った。鷹の本心から心配してくれている気持ちも、痛いほど解るからだった。

そうして繭は一旦自宅へと戻り、段々と夜の帷が山を包み込んでいく。それでも鷹を含む一部の人間で夕捜しは続けられる事になったのだった。

あれから数時間。家には繭が、暖をとりながらゆらゆらと揺れる暖炉の火を見つめていた。時々捜しに行こうかと思つて立ち上がるけれど、鷹の気持ちを考えるとどうしても無茶出来ないと考え直してまた座るの繰り返しだった。

「夕…」

それに妹がひょっこり帰ってきたときに私が居なかったら幼い妹は寂しいだろうな、と鷹の言葉を反芻していた。

時刻はもう十時を過ぎていた。夕が作ったと思わしき料理の他に、調達してきた食材を使ってもう一品料理したのだが、繭は手をつけていなかった。とても食べるような気分にはならなかった。

肌寒い部屋には小さな火が薪をばちと鳴らす音と、古びた時計の時を刻む音、繭の静かでか細い呼吸の音しかなかった。只々静寂が繭をどろっと包み込んでいた。妹の夕が居ないとこんなに静かなのかと辛そうに微笑していた。

その時だった。玄関から戸を静かに叩く音が聞こえたのだ。俯いていた顔も瞬時に玄関の方に向き、立ち上がる。

「夕…夕！」

鼓動が高鳴る。躓きながらも焦る気持ちをはぐり、繭は手持ち台に乗せた蠟燭の灯りを手に持って玄関へと小走りする。

「…御免下さい」

聞こえてきたのは男性の声だった。期待した夕の可愛い声ではなかったからか、悲しそうに顔を歪めてしまった。しかし考えてもみれば、夕は実家の玄関を軽く叩くということをするわけが無かった。しかし鷹の声という訳でもないし、ましてや知っている声でもない。兎に角繭は玄関の戸を開けてあげることにした。

「どちら様でしょうか」

玄関を開けると雪が風に舞い、入ってきた冷気に身を震わせる。

夜の冬山はもう暗闇と雪で視界も利かないし気温も相当に低く過酷になっている。その雪中に二人の人が立っていた。なんとも不思議な雰囲気を感じていたのが凄く印象的だった。

向かって左側に立っている男は黒髪で、蠟燭の灯りで優しく照らされた瞳は翡翠色だった。見つめれば見つめるほど惹き込まれるような気がする優しい瞳だった。そして深緑色した浴衣、上に厚手の布を羽織っているものの寒さで所々凍ってしまっている。

向かって右側には碧眼の男の着物をぎゅっと掴んでいる小さな女の子。淡い桜色した着物の上に男の物であろう衣を羽織っていた。そして目を奪われる程に真っ白な長い髪は、綺麗な白雪を彷彿させる。瞳は紅蓮の鮮やかな紅。その対照的な容姿はこの場の時間の流れを忘れてしまう程に幻想的で不思議な二人だった。

「夜分遅くに申し訳ない。この山を越える途中だったんだが、この通り吹雪で、何とか一晩宿を御願いできないだろうか。せめて連れの小さな娘だけでも」

申し訳なさそうに微笑む碧眼の男と女の子はもう既に疲労困憊な様子で、最初は夕が居ない精神的状況では満足に持て成すことが出来なと思ったけれど、繭の両親は旅人へは優しく持て成しなさい、という教えを思い出した。

「勿論、ささ御上がり下さいな。寒かったですよ」

繭は玄関に立つ二人を家内へと招き入れた。男は安堵からかほつと胸を撫で下ろすと会釈をして、繭に習って暖かい部屋の中へと入っていく。今までの酷い寒さから一転、まさに天国のような暖かさだった。二人の凍っていた着物から溶け出した雫が、静かに落ちていく。

「あの、夜分にすみません。本当に感謝してます」

碧眼の男は凄く安堵した表情で、ずっと男の浴衣の裾を掴んでいる幼い女の子の頭を撫でていた。

「その火の処で暖をとって下さいね」

台所へと向かいながら繭がそう促す途中、碧眼の男の左手に巻かれた包帯の赤が目に入った。一目で解る程の出血だった。その赤い液体を吸った包帯には既に白い箇所が全く無く、凍ってしまった。恐らく傷口が閉じきつてないままに。

「ちょ…っと、貴男それ…」

繭が明らかに動揺した口振りで碧眼の男に戸惑いの視線を向けると、幼い女の子が無表情だった顔を初めて歪ませ、心配そうに裾を引っ張り男を見上げている。

「ああ、止血が甘かった。いやすまない」

静かに微笑むと庇うように左手を押さえる。隣の幼い女の子は「痛い黙ってたの……？」と碧眼の男の裾を強く握っていた。

繭は家に常備してある薬箱から包帯を取り出して碧眼の男へ心配そうに渡す。あまり血の赤は得意ではないのか、繭は時折視線をずらしていた。

「有り難う、助かった」

側に寄り添う女の子の頭を撫でて、「大丈夫」と呟くと、碧眼の男は外へと席を外した。繭の戸惑いの視線に気付いていたからだろう。残された幼い女の子はどこか寂しそうにその姿を見つめていた。繭は、玄関から出て行く碧眼の男を心配そうにして見ていると、ふと視線を感じた。白い髪の幼い女の子がちらちらと時折繭に視線を送っていたからだ。

こうして淡い灯りの下よく見ると本当に綺麗な髪で、紅蓮の瞳は透き通るように美しい。有り体に言えば美少女だった。

「えっと……今から何か温かいもの作るからね？」

繭も妹がいるから、幼い娘の扱いには慣れているつもりだったのだが、何故か緊張してしまっていた。

「……」

言葉は発してはくれなかった。けれど静かに首を小さく縦に振ったのを見て、繭は微笑みながら台所へと向かっていく。

夕の分は寄せてある。今日は夕が野菜を使った美味しそうな鍋を作ってくれているので、それを二人の為によう。凍えた身体にはこの料理は暖かく染み渡るはずだ。外から帰ってきた時の暖かい料理は何にも変えられない程の味なのだと、繭は身をもってよく思うのだ。

料理をよそつて、幼い女の子に持っていこうと向かっている途中に玄関から碧眼の男がやってきた。その左手には真新しい真っ白の包帯が巻かれていた。

「包帯どうも有難う御座いました、助かりました」



「いえいえ、丁度料理も拵えましたのでどうぞおあがりください」  
目の前に用意された料理を見て、寒さに震えながらも碧眼の男は驚いた表情で中へ入っていく。

「なんと…まさかこんな御馳走まで用意してもらえるなんて」

碧眼の男は嬉しそうに女の子の隣に腰を落とすと目の前の料理に目を輝かせる。二人にとって久々の温かい料理だったからだ。

「本当に頂いていいんですか？」

「勿論ですよ、さあ、冷めない内に食べちゃってください」

丁寧な手を合わせると、碧眼の男は小さく祈るように「頂きます」と呟いた。それを隣で見ていた女の子も真似して手を合わせて、「い…いただきます」と、まるでこうゆう食事に慣れていないように静かに呟いていた。

「う、美味い…ああこりやまるで桃源郷にいるようだ」

久々の温かい食事なのか、碧眼の男は静かに微笑みながら頬を緩めます。隣の女の子は夢中で食べている。そんな姿を見て繭はふと、妹の夕を思い出した。焦燥感はまだに繭の心の臓を激しく鼓動させる。

暫く二人の食事に見とれてしまっていた。あまりに美味しそうに食べる姿は拵えた方からは見て嬉しくなるものだ。

気付くと男は既に料理を平らげてしまっていて、いつからそうだったのか気が付かなかったけれど繭のほうを静かにじっと見つめていた。

「あの…なにか？」

「凄く美味しかったです。ご馳走様でした」

「お粗末様でした。満足頂けましたか？」

「はい、本当にご馳走様でした。それと…いや、気のせいならば聞き流して下さい。今日貴女に逢ってからずっと…とても悲しそうな顔をしている気がして」

どくんっと心臓が波打つ。繭は自分の顔に手をやり、動揺を隠せずにはいた。

「一晩世話になっていることですし、こうして御馳走まで振る舞って頂いた。あつかましいかも知れませんがもし力になれることならば」

刹那、繭の中に張り詰めていた何かが音をたてて壊れた。必死に取り繕った嘘の平静はそんな些細な一言で崩壊してしまった。気付けば繭は頬に伝う涙を止められずにいた。

嗚咽は小さな部屋に静かに響き、繭の華奢な身体は震えていた。幾らかの時間が過ぎ、落ち着いてきた所で碧眼の男に全てを伝えたのだった。

「うーん、成る程…」

神妙な顔付きで話を聞いていた碧眼の男は、口元に手を添えるとなにか、分厚い辞書などをぱらぱらと検索をかけているように深く、深く思慮していた。

「な、なにか心辺りがありますか？道中何か気付いた事とか」

口早に質問を繰り返す繭に対して、目を開けた碧眼の男は繭の後ろの方を見るように目を細めた。

「どうしたらいいかな。あまり気が進まないけれど、もう此は話すより視せたほうが早いかな…」

そう呟いて碧眼の男はゆっくりと立ち上がると、浴衣を簡単に直す、隣に座る幼い女の子の頭を優しく撫でた。繭は先程からの話の流れから、男が言った視せたほうがという言い方が理解出来ずにいた。

「あ、あの…一体何を…？」

訳も判らない内に碧眼の男は繭の隣に腰を降ろすと諭すように微笑んで左手で頭を撫でた。

「この世界には、様々な生命が存在している。その中にはヒトに感じる事の出来ない生命も、いる。其れらは俺らが生きるこの儚い世界に、ずっとずっと昔から実は満ち溢れているんだ」

突然の御伽噺のような話に繭は戸惑いを隠せずにいると、碧眼の男は繭の背中に手を添えた。

「……力を抜いて。少しだけ、今から視える世界から目を逸らさないでほしい」

繭の背中にそつと手の平が優しく触れる。ふわつとした感覚が包んだと思うと暖かいような、少し背筋が凍るような寒気がしたりと有り体にいえば感じた事のない感覚が繭を包んでいた。

そばにいる碧眼の男を繭は、覚束無い表情で見る。男の諭すような表情には碧眼がゆらりと泳ぎどこか戸惑いを感じているようにも見えた。

「繭、向こう。台所のほう」

そう呟く優しい碧眼の男。しかし繭は目を離せなかった。男の顔、ではなくその後ろ。視えてしまっていた。自身の感覚が壊れてしまったのかと目を疑った。

碧眼の男に纏わりつくような淡い光を放つ幾つかの球体。男の瞳のような翡翠の色や、薄い蒼。安定しない其れは細長く線のようになったかと思えばゆらゆらと浮かんでいる。よく凝らして視ると想像もつかないような其れは当たり前のように部屋中にいた。綺麗な白髪の女の子の周りにも、其れは漂っていた。

「あ……あ……えつ……あの……」

いきなり知らない世界に飛び込んでしまったのではないかと、繭は思わずにはいられなかった。目の前に広がっている想像を遙かに外れていて、未知、幻想的ともいえる光景に繭の心臓は激しく鼓動を刻む。

「御免。あまり視せるのは禁忌だったりするんだけど……」

ゆらゆらと碧眼が揺れる。ふと視線がぶれる。繭はその視線を追う様に台所のほうに顔を向ける。

「タ……」

とくんつと弾んだ心臓。見開いたままの瞳。半開きの口からは微弱な呼吸。言葉を失った人とは、こんな表情をするのかと碧眼の男は繭を見つめていた。

「タ……」

幻想の中、繭は正気に戻ると同時に台所へと小走りしていくその表情は、依然不安の色そのものだった。そこには明らかに普通ではない妹の姿があったのである。

夕と思われる其れは、二重三重幾重にもだぶって見え、半透明に透けてしまっている。小さな身体は時折淡い翡翠の色になったかと思えばほぼ透明にまで薄くなったりしていた。

恐る恐る手を伸ばしてみても、無情にもすり抜けてしまう。

繭はそんな姿に妹だというのに遠い、余りにも遠い存在に感じてしまっていた。果たしてこの状態を人と呼べるのかと。

「繭…」

後ろから囁くように呼ぶ自分の名前の響きが繭の鼓膜を揺らした。一気に涙が溢れた。

「何故…何故…どうしたらいいの…？」

繭は振り返ると碧眼の男に縋るように問い掛ける。まだ幼さが残る顔が涙で濡れてしまっているのを見ると男は優しく繭の頭を撫でた。

「確かに今は人とは呼べる状態では、ない。繭の妹、夕は酷く曖昧な存在になってしまっている。でもこうなってしまったからにはなにか原因があるはずだし、微かだけれど心当たりもある」

大丈夫、と。だから大丈夫だと諭すように呟くと頭を撫でた。

不安を拭い去れない繭は、今まで視ていた幻想的な世界が薄くなつていき、次第に視えなくなると再び泣き出し、何もかも包みこむような空気を纏う碧眼の男に抱きつく形で、暫く泣いていたのだった。

「外で搜索をしてる久々には一旦家に戻るように繭から伝えてもらえるか？それとちょっと調べたい事があるからからこの場所少し借りる」

「あ、はい。分かりました」

あれからどの位時間がたっただろうか。落ち着きを取り戻した繭

に、碧眼の男はそう指示すると、白い髪の子を呼ぶと何やら準備を始めていた。

繭は準備しているのを眺めていると、指示された事を思い出し駆け足で玄関を開け、外へと向かう。深々と降る雪は月明かりに照らされ淡く仄かに光を放っていた。

冷たい雪の中少し歩くと、ちよつと中休みしていた除雪隊の姿があった。

「た、鷹さんは、居ますか？」

吐息が白く空に消える。繭は近くにいた除雪隊の一人に聞くと、すぐ近くに案内された。そこには鷹の姿があった。

「おう、繭。すまない、未だ見つかってなくて…皆今少し休憩させたらまた探すから、お前は家で待ってな。風邪ひいちまう」

明るい表情で安心させようと優しく話す鷹は、雪で衣服は濡れて所々凍っている。疲れているはずなのに、疲れきっているはずなのにと、それを悟られないようにする鷹の優しさに繭は思わず泣いてしまいそうになっていた。

「どうした？繭」

「あの、今日旅人さんがきて、宿を探していたので私の家に泊めてあげる事にしたんです。そしたら、その旅人さんが力を貸してくれるっていつて、それで外で搜索してくれてる人を一旦引き揚げるように言われたんです」

「ほ、本当か」

差し込んできた希望の光に二人は顔を緩める。鷹は周りにいた連中に事情を説明すると、「良かった…」と感嘆の声が聞こえた。

「しかし、その二人組の旅人ってのは信用出来るのか？もしかしたら、物盗かも知れないんじゃない」

鷹が気付いた事をそのまま繭に問う。つられて疑念を抱き始めた鷹の仲間達が心配そうに繭を見つめる。その姿も、今まで一生懸命搜索してくれた事で、疲れきっていた。

「私は…信じてます。無闇に旅人を疑うものじゃ、ないと父が言っ

ていたので」

それにすごくいい人達ですし、と微笑んでみせる。その表情も、また疲れで微妙な顔付きだった。

「とはいえ、一応気を付けておきます」

「そうだな、なにかあったらすぐに向かうから、今日はもう休もう。心配だらうけれど、夕の為に体調崩さないようにな。繭」

そう言うと思は手伝ってくれていた仕事仲間達にも今日は一旦帰るように指揮をとっていた。その力強さに繭は頭を深く下げた。

「今日はどうもありがとう御座いました」

「いやいや、心配だらうけれどももう少し頑張るべ、なっ皆」

「おう。明日また、探してみるから」

「繭ちゃんも今日はゆっくり体を休めてね」

除雪隊の暖かい言葉と笑顔が、凝り固まっていた繭の心を優しくほぐしてくれたのだった。

それから家に戻る途中、玄関の近くで何かしてる碧眼の男と女の子が繭の目に入った。

「ただいま帰りました。えと、なにしてるんですか？」

よく見ると数本の細長い硝子の容器に雪を入れているようだった。

「お疲れ様。ああ、これは雪を採取してた所だ。この辺りの生命を調べてみたくてな」

寒空の下、硝子容器を見つめる碧眼の男の側で女の子は雪の詰まった数本の容器を持っていた。

「雪、ですか。でも風邪をひかない内に家に入って下さいね」

「ありがとう、もう採取終わったから上がらせてもらっよ」

玄関を開けると居間の片隅に小さな作業台があった。いつの間はどこから？と繭は少し不思議に思ったのだが、二人は直ぐにその作業場で何か調べ物が始まったので、そんな違和感は気にならなくなっていた。

「えっと…私なにか手伝える事、ありますか？」

見たことのない古めかしい本や、得体の知れない道具を横目でみつつ、なにか手伝いたい気持ち伝える。

「そうだな、うーん…じゃあ今日はもう休んでもらっていいかな？あ、明日晴れるように祈ってってくれると助かる」

思っていた手伝いとは程遠い返答に繭は少し拍子抜けしたけれど、実際体は正直だった。下山登山した影響で膝も笑っているし、身体のおちこちが痛い。隠していた疲れきった体の状態を容易く見透かされた気がして、繭は頬を染めると少し恥ずかしくなった。

「はい、御言葉に甘えて先に休みますね。どうかあまり夜更かしして体調を崩さないよう、お願いします。ではおやすみなさい」

「うん、ありがとう。ちょっとしたら俺も休ませてもらうよ。今日は本当にありがとう、おやすみ」

ぺこつと頭を下げると繭は眠そうに寝室へと向かっていく。その足取りはふらふらと危ういものだった。

寝室に入った繭は鉛のような身体を休めながら今日の事をそつと反芻する。下山して売りに行った着物や反物が思いの他高く売れたこと。美味しそうな食材や、乾物、保存食が沢山手に入ったこと。相も変わらず山は眼も眩む程に壮大で綺麗だったこと、山道は厳しかったこと。そして。

妹の夕が居なくなり、ヒトとは呼べない状態になっていたこと。そして視た事の無い世界を視いてて、其処に夕がいると教えてくれた碧眼の男と、幼い女の子。

どうか…。どうか夕が戻ってきますように、皆が笑える結末が来ますようにと、神様に祈ってる内に何時の間にか眠りの世界に旅立っていったのだった。

繭が眠りに誘われた頃、碧眼の男と白雪は寄り添いながら薪の暖かみですっかり溶けた雪を眺めていた。

「これって…」

「ああ、間違いない。羽雪<sup>はねゆき</sup>だな」

「羽、雪…？」

「前も教えたように、この今も俺や白雪の周りを翡翠色とか淡い光を放って形を変えながらふわふわしてるようなこれらを総して色鬼しきと呼んでいる。生命そのものの姿だ。今よりずっと昔、太古から蠢蠢いているとされていて、その色鬼ってのは途方もないような種類があると云われているんだ」

「それでこれが、羽雪と云う色鬼…」

白雪が覗き込む硝子容器の中には、一本だけ全く溶けてない雪が詰まっていた。他の雪はとくに溶けて水になっているというのに。「よくみると解るんだけど、結晶の形がまるで違うんだ。ほら、これが雪の結晶の絵でこっちが羽雪の絵だ」

碧眼の男は古めかしい本を開いて白雪に見せる。先人から何代にも何人にも受け継がれてきた古書である。興味があるのか受け取ると宝物を触るように大切そうに扱いながら、まじまじと見つめていた。

「本当だ…この雪の結晶のほうがなんだか綺麗」

「羽雪になる色鬼が、雪に似せようとして上手く似せられなかったのかもしれないな」

白雪は古書に描かれている羽雪の絵と実物を興味深そうに見比べている。

「あ、羽雪直接触るなよ白雪。夕があの状態、半分色鬼になってしまっている原因は羽雪で間違いないから」

碧眼の男の説明を受けると白雪は静かにゆっくりと羽雪の入った硝子容器を台に置く。

「そ、そうゆうことは早く言って頂戴」

明らかに動揺しながら碧眼の男の二の腕をぱちんと軽く叩く。白雪は動揺こそしてはいるものの、こうした何気ない時間の大切さや愛しさに改めて気付くと頬を赤らめて俯いた。

「ああ、ごめんごめん。一応治療する術は知っていたから大丈夫」

「そうじゃない」



貴方に感謝しているの。と小声で呟くとほんの少し不機嫌にそっぽ向く白雪を見て碧眼の男はよく聞こえず、意味が解らずにただただ首を捻るだけだった。

「えっと、じゃああの子の治療も出来るということでもいいんだよね？」

「うーん、一か八か、かな。実際に試したことはないから。明日晴れたら治療してみる」

そう言う少し眠そうに浴衣の裾で眼を擦る。時刻は既に夜中の二時半を過ぎていて、あまりに夢中だったのか二人は全く気付かなかった。

「もう遅い、あちらの物置に寢床を用意してくれていたみたいだ、先にいって休みな白雪」

「うん…ん？貴方は？」

と、問いかけると碧眼の男は灰色の煙草を咥えて玄関に向かっていった。

「流石に泊まらせてもらう家の中ではこの嗜好は楽しめないよ」

確かに、と小さく微笑めばおやすみと呟き、白雪は寢床へと向かっていった。

深々と降る雪は月明かりに照らされて淡く光り、碧眼の男の口から吐息と共に紫煙がゆらりふわり冬の空で踊る。山の深夜は只々静寂で、無音に鼓膜がつぶされる感覚は寒さと相俟って冬山に居るんだと認識させるに十分だった。

「白雪、だいぶ喋るようになったし表情も豊かになってきたな」

出会い頭、旅を始めた頃は心もまだ開ききってなくてとつつきにくく、感情そのものの表現の仕方がわからなかったのかなと男は煙草を吸いながら思っていた。

「明日、晴れるといいな。なあ色鬼よ」

煙草を深く吸い込むと男の周りに色とりどりの色鬼が纏わり付き

ていた。淡く光る其れは気付けば周りに集まって美しい冬景色を更に幻想的に彩り、碧眼の男はそれを眺めると静かに微笑み、眼を閉じて煙草を深く吸い込んだ。

そして夜が明けて翌日。温かい日差しが山に朝を告げる太陽がゆっくりと昇り、雲一つ無い晴天となった。

繭の家の前にはもう既に碧眼の男と白雪、そして繭が朝の太陽を浴びていた。

「えっと、昨日言ってた通りの晴天ですけど、これで本当に夕は元に戻るのでしょうか？」

心配そうに問う繭は、昨日みた夕の状態を思い出していた。半透明で不確かな、淡い光を帯びた大切な妹を。

「ああ、やってみる。じゃあ少し離れてもらえるか」

そう呟くと碧眼の男はその綺麗な瞳を閉じた。

「さあ、此方へ」

女の子は繭から少し離れた何も無い所を見つめ、儀式めいたようにそう呟く。さらさらと太陽の光を浴びた白い髪が風になびく。見える筈のない綺麗な粒子がふわり舞ったように見え、桜色した着物姿が異様に綺麗で繭は思わず見蕩れてしまった。

そして碧眼の男は何かを書き始める。地面でもなく紙にでもなく、何も書く物がない空中に。繭にはなんにも見えないけれど、白雪には何かが書いてあるのか、どんな意味があるのか理解出来ているのだろう、男の其の様子をじっと見つめていた。

指先で書き終わると太陽に向かって何かを引っ張るような仕草をした。その刹那。

其処にはゆっくりと身体の色が戻っていく夕の姿があった。碧眼の男の向かいにちょこんと座っている夕は段々と血の気を取り戻し

ていく。繭にももうすっかりとその姿が見えている。

「夕…夕！」

眩い朝日の下、寝呆け眼の夕は繭が泣きながら抱き着いてきたのを不思議そうに首を傾げている。

「お、おねえちゃ、いつの間に？帰ってたんだ繭お姉ちゃん」

あれ、でもなんで夕、お外にいるんだろう？と何がなんだか解らないようで、何度も首を捻りつつも姉の繭があまりにも嬉しそうに涙を流しながら抱き着いてくるのが、なんとなく心配かけてしまったんだなあと思いついた。

「繭お姉ちゃんおかえり。おつかれさま。家に帰ろう？今日は夕、野菜の鍋を作ったんだよ。寒かったでしょ？早く暖まって欲しいな」

「うんっ…そうだね…うん…」

そう頷くと出会ってから一番の微笑みを碧眼の男に向けて「本当に有り難う御座いました…」と何度も何度も感謝の言葉を紡いだのだった。

あれから近所の鷹やその仲間、仲良くしてくれているおばちゃん等徐々に集まってきた。繭は夕や鷹達等心配してくれた人達に、碧眼の男と白雪のことを簡単に紹介した。

「それにしても本当に見つかって良かったよ、夕」

嬉しそうにはにかみながら夕を抱きしめる鷹。本当に心配だったのだろう、目には薄らと涙が浮かんでいた。その周りには鷹と一緒に夕を探していた仕事仲間、近所のおばちゃん。夕の周りにはもう春が来たように暖かで幸せで、笑顔と涙で溢れていた。

「もっとゆっくりしていただければ良かったのに。もっとお話も聞きたかったし何よりちゃんと御礼もしたかったです」

落ち着いた頃、碧眼の男はもうこの山を後にする旨を皆に伝えていた。これからまた下山するので、天気がいい内に旅立ちたかったのだ。荷物は昨日の内にまとめておいている。

「すみません、急ですがもう行く事にします。昨晩は有り難う、本当に助かったよ」

朝日に照らされ風に揺れる黒髪、白髪。碧眼に紅蓮の灼眼。集落の人々はそのあまりの奇異、怪異、畏怖的で相對して不思議な二人を見て、変に騒ぎ立てることは無かった。いやむしろ。

「旅の人、道中気を付けて。この恩は忘れないよ、なあみんな？ 繭？」

おおおおーっと朝から元気な村人に、碧眼の男も、白雪も、そこにいる皆が微笑んだ。春が来た。

「行っちゃった」

夕とぎゅつと手を繋いで、二人が歩いていった方を見つめる。大きな足跡と小さな足跡が違ふ歩幅で、されど隣同士寄り添って残っていた。

「さっきの連中が、夕のこと助けてくれたんだよね？ また来てくれるといいなあ」

無邪気な笑顔は小春模様。つられて繭も綻び微笑む。

「うん、また寄ってくれるといいね… って、あつ…」

「わあ…」

繭と夕の目の前、というより周りでなにかきらきらと光っている。これはこの辺り特有の自然現象と云われ、数多いなんらかの条件が揃わないと見れないという春を告げる美しい、それはあまりに美しい現象。

「繭お姉ちゃん、見て、光が舞ってるーっ」

ダイヤモンドダスト、と呼ばれる現象がある。空気内の水分が冷えて凍って、太陽の光をきらきらと反射する現象。其れとはまた違う、もっと色が鮮やかで量も多い。そして何より地面から天に向かって舞い上がるように光の粒が流れているのだ。

「わ、私も初めてみたかも… うわあ、綺麗…」

足元から溢れる光りの粒が、なんとなく碧眼の男から視せてもらった世界を連想させた。其れほどまでに圧倒的な自然の幻想現象だった。この現象を見たものは言葉を失い、暫くその幻想的な世界に酔いしれるのだとゆう。

「これはね、天雪あまゆきと昔からいわれておるよ、この春を告げる綺麗な現象」

近所の物知りなおばちゃんが教えてくれた。ほんとに滅多に見られない現象なのだという。

「じゃあ、天雪に祝福されているみたいだね、私達と、旅人さん」  
天に舞い上がる光の粒子の中微笑む夕は、天使なのではないかと思うくらい、皆が見蕩れてしまっていた。

「どうか幸多からんことを御祈り申しあげます」

舞い上がる幻想的な光の粒子の中、繭はそう恩人の二人の事を強く想い、感謝しきれない思いを祈りに変えて、そつと目をとじたのだった。

「こりや…すごいな…」

「わ…綺麗…」

丁度碧眼の男が煙草に火をつけた頃、幻想的な現象、天雪が舞い上がった。

「ねえ、これってもしかして」

「そつ、羽雪だな。きつと春の匂いに追い出されて、空に還ったんだらうな」

それにしても…と。深く紫煙を吸い込み吐き出すとその光景に目を奪われて「こりや見事だな」と呟かずにはいらなかった様で、白雪と共に歩いていた足を止めて暫く天雪に見蕩れていたのだった。

## 第参話 雪、芽吹く春（後書き）

水域です。

私は冬は凄く雪が降る地域に住んでいて、近くには山もありますので雪と山のお話を書きたいなあと、冬の間ゆつくりと執筆しました。冬の山は凄く静かで、それでいて非常に寒いです。でも独特の空気はどこか身体の汚い部分を綺麗にしてくれるような気がします。

今回登場した「色鬼」は、このシリーズに深く関ってきますので、いつ頃碧眼の彼に説明してもらおうか思考した結果今回説明してもらいました。

これからまたちよつとずつ物語の進行と共に語っていこうと想います。

それにしても、天雪。見てみたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9823o/>

---

古秘の水域

2011年4月23日17時30分発行